

---

# つくりフェイズ移動論

式織 檻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つくみフェイズ移動論

### 【Nコード】

N9110H

### 【作者名】

式織 檻

### 【あらすじ】

加賀野つくみ先輩のアシスタントとして、『ワールド・マテリアル』探しをすることになった僕。先輩に連れられて足を踏み入れたのは 反位相の世界 だった……。

## プロローグ

「つまり、君は『単純に二つに分けることができるもの』の方が好きだと、そういうことなのか？ ふーむ、なるほどねえ……」

何か引つかかるんですか、と僕は尋ねてみた。

「……いや、引つかかるといっつか、納得してるんだよ。確かに、人類の英知っていうのは単純化することによって発展してきたからね。『分類』なんていうのも単純化の最も有用なツールの一種だけれど、そんなものは、ほぼすべての学問でなされているものだ。物理も、化学も、生物も、地学も、文学も、和声学も。この『分類』っていうものがなかったら、それだけで、地球上の様相は相当変わっていただろうね。そして、この単純化のツールの一種である『分類』の中で、さらに最も単純化されたものこそが、君の言う『二つに区分すること』、『二つの数値で測ること』、つまりは『二元論』って奴さ」

急に高尚な話に跳んだ気がしますが、と僕は相槌代わりに答えた。

「ははっ。高尚ってほどでもないよ。この話の発端は、相変わらず君の『数学はプラスとマイナスだけで手一杯だ。何ですか、あの虚数ってのは？ まったくわけがわかりません！』という愚痴だよ。それ以上でも以下でもない。……ふむ？ そう言えばこの『以上でも以下でもない』っていう表現って、よく使われるけど、やっぱり矛盾しているよねえ？ 以上でもなく、以下でもないなら、イコールでもありやしないじゃないか。つまり、元々の意味って言うのは『そんなものは存在しない』っていう、全否定代わりのものだったのかも。そう考えると、この表現もなかなか安くはないな」

いや、話が逸れたね。あたしの悪い癖だ。悪い悪い。いい加減、元の道に戻ろう。……………おや？ 今あたしは、何やら一つ名言を思いついてしまったようだ。『元の道に戻る』ならぬ『元の未知に戻る』っていうのはどうだ？ つまり我々が今居る場所というのは、未知こそが前提なんだ。未知こそが道なんだよ。道が未知だからこそ、その道を進む意義が

いいから話を戻してください、と僕はため息混じりに言った。

「ああ、悪かったよ、悪かった。えーと、どこまで話したかな？ ……そうだ、『二元論』についてだね。確かに二元論は美しいものだ。麗しいものだ。あたしのルックスと同じくらいにね。善と悪、右と左、北と南、白と黒、天と地。あれかこれか、あっちかそっちか。すべてがすべてが二択問題だ。片方の否定がもう片方、もう片方の否定はもう片方のもう片方。それだけのことで片がつく。悩む甲斐もない理論だよ。そして何より、この論の一番のメリットは、これら二種類のもを同じだけ足し合わせれば、簡単に『相殺』されてしまうところだ」

相殺つてのはいい言葉ですねえ、と僕はうんうん頷いた。

「確かにね。『相殺』。これほど単純で、明快で、便利な理論はないだろうね。これを発案した人にはノーベル賞を十個くらい与えてもいいと思うよ。もしくは、膨大な著作権料を得る資格があるね。世界中の誰もが扱っている理屈で、これがなかったら基礎数学すら成り立たないんだから。特に、難しいことを考えるのが苦手な人間が好き好んでいるものさ」

……………。

「……ん？ どうした？ 何やら急に怪訝な表情になったけれど？ ……ああ、いやいや、別に君のことを特別に指した発言じゃなかったんだ、今のは。一般論として言っただけだ、一般論。気分を害したのなら素直に謝るよ。悪かった。程度の差こそあれ、『相殺』っていうのは人を選ばず、老若男女にとつて喜ぶべき言葉だよ……ふん？ そういえば、君はドッペルゲンガーってのを知っているかい？ 割り合い有名な話だと思うけれど、君の常識的事項の中にこの言葉は含まれてるのかな？」

そりゃあ一応知ってはいますけど、また話題をどこかにずらすつもりですか、と僕は半目で見返しながら答えた。

「いやいやいや、ちゃんと筋道に沿った話題だよ。安心して聞いててくれ。それでね、そのドッペルゲンガーという奴だけね。一般的に伝え聞く話では『自分とまったく同じ見た目をしたドッペルゲンガーに出会うと、自分が死んでしまふ』というものらしいね。怪談話の類の一つのようにも聞こえるんだが……ただ、あたしは、これもまた『相殺』の一つなんじゃないかと思ってるんだ」

ドッペルゲンガーが『相殺』ってのは一体どういうことですか、と僕は首をひねりながら聞き返してみた。

「つまりだね、今存在している『自分』がプラスだとしたら、そのドッペルゲンガーである『自分』はマイナスだっていうことだよ。正反対のベクトルを持っていてることだ。そしてその二人の『自分』の数値はまったく同じ。そりゃそうだよ。両方ともまったく同じ『自分』なんだから。コンマ一すら違はずがない……それでもって、もし二人が出会ってしまったら、二人が足し合わされてしまえば、答えはゼロになるのは道理だろう？ ゼロ、零、存在しない。つまり、死だ」

それが『相殺』って奴だっというんですか、と僕は口を尖らせながら疑問を呈した。

「そうさ。理屈は同じだろう？ プラスとマイナスの概念さえ知っていれば、容易に理解できる内容さ。この世界は『無』からできたなんていう話があるけれど、もしこの世のすべての物質にドッペルゲンガーが存在したなら、この話も信じられるよね。みんながみんなドッペルゲンガーに出会い終われば、世界はまた『無』へと戻って寸法だ」

しかしドッペルゲンガーは人間に対しての話で、他の物質にまで拡張するのは飛躍しすぎじゃないですか、と僕は反論を試みた。

「いや、それがそうでもないのさ。実はこの世には『反物質』っていうのがあってね。つまりは、この世に存在する物質と正反対の物質が存在するらしいのさ。世界の始まりの時、ようはビッグバンの時に、この世の源はこの『物質』と『反物質』に分かれたという話なんだ。その『反物質』というものの存在はすでに科学的に立証されてるし、人工的に作られたりもしてるものなんだから。だから疑問の余地はない話だけど　さて、話題がちょうど『世界の始まり』っていうところにたどり着いたわけだけれど　」

「いやいやいやいや、今のは完全にあなたが無理矢理誘導してたじゃないですか、と僕は首を水平に振りながら答えた。

「そうだとしても、そんなのはたいした問題じゃないよ。今現在、あたしたち二人は『世界の創始』について話しているという事実は覆しようはないんだからね。いい加減、話を本題に移させてもらおうよ　で、だ。『世界の創始』って言葉を聞いて、わが天神岬てんじんみさき

高校の生徒ならばまず先に浮かぶキーワードとして、一体何が挙げられるかな？

ふふ。聞き方が少々あざとかったかな？  
もしくは聞くまでもない話だったかな？ そうさ。『そもさん』の次が『せつぱ』であるのと同様に、『世界の創始』に続く言葉、それこそが 『ワールド・マテリアル』さ

まあそりゃそうでしょうね、と僕は肩をすくめながら合いの手を入れる。

「その名札の柄からして、君は二年生だろう？ 一年以上前の話とはいえ、君だつて入学した時の驚愕は覚えてるんじゃないのか？  
これから始まる高校生活にワクワクしながら門をくぐったら、上級生がグループを作つてわけのわからない宝探しに心血を注いでいたんだから。傍から見れば、世間というものがだいぶわかつてきた年頃たる高校生のすることじゃないようにも見えるかもしれないけどね。……でも、この『ワールド・マテリアル』の何たるかを聞いた時、君も納得したんじゃないか？ どうして先輩方がこんなに一生懸命になっているのか。そして興味をそそられたんじゃないのか？  
自分もその宝探しに加わつてみたい、と」

何かを企んでいるようないやらしい笑みを目の前にして、僕はようやくこの人の意図が読めてきた。

「ところで、あたしの悪い癖がまたもや発動してしまつたがために再び今までとはまったく関係のない話題に移つてしまふだけだねえ  
実は今現在、あたしはアシスタントを募集しているんだ。あたしの様々な活動を手助けしてくれる優秀なアシスタントをね。梓はたった一名だから、早くしないと埋まってしまうツチノコやネツシーよりもレアな役職なんだけれど。……どうだろう？ た  
例えば、今君が深々と頭を下げながら『やらせてください』とお願

いしてきたら、今のあたしは、この役職を君に与えてあげてもやぶさかではない心情なだけれどね」

いや、あの、その、僕も僕で結構忙しいもので、と僕は困ったような愛想笑い作りながら答えた。

「……………そうだね。君はまず一つ、理解していないことがある。至極重要な点だから心して聞きたまえ　　あたしのアシスタントになるということは、それ即ち、常日頃からあたしの傍にいて、あたしと会話する機会が大幅に増えるということの意味しているんだ。あたしにはこの通り、世界各国万人の女神が嫉妬するほどの美貌が備わっているわけだし、男としてそんな女性の隣に座していることがどれだけ栄誉なことか、君にも分かるだろう？　現に、今の君だつてあたしを目の前にして緊張してるせいか、口数がやたら少ないじゃないか」

いや、見ず知らずの先輩いきなり喫茶店に連れてこられれば誰だつて戸惑いますよ、と僕は両肩を持ち上げながら答えた。

「うつつふふ。もう、照れ隠しが下手だなあ。見栄つ張りなんだから。見え見えだよ。かわいいなあ、もう。……………うふふ。今さら隠さなくたつて、誰も君をとがめる人はいないんだよ？」

……………。

「……………やれやれ、まさかここまで奥手な子だとは思わなかった。しようがない。もう一つ、別な話を試してみようか。　　今、君の目の前には、この喫茶店の特製ケーキ『春の夜のせせらぎ』が、三分の一ほど食された状態で鎮座しているねえ。この界限ではちよつとした有名メニューで、あたしも大好きな一品だ。一切れ七百元と



少々お高いが、それだけの金額を出しても食べたいと思わせるケーキだよ。たとえば……たとえばの話だけれども、もしあたしと一緒にこの喫茶店に入った人間があたしのアシスタントだったとした場合、あたしはアシスタント思いだからねえ、一回ぐらいはこのケーキをタダでおごつてあげてもいいと思ったりもするんだよ

あたしが言っている意味、わかるかい？」

わかりますが、残念ながら僕は金の貸し借りについてきっちりする人間ですし、さらにこのメニューを頼んだ時点でこの七百円は自分で払うつもりでしたから、その辺は何も問題はありません、と僕はすました表情を作りながら答えた。そして、財布を取り出そうとズボンのポケットに手をつっ込んだ、のだが

あれ？

僕の手は布ばかりを掴んで、なかなか重量のあるものを握れないでいる。三秒ほど自分のポケットをまさぐった後、僕はようやく気付いた。

そうだった、今日は木曜だった。

両親が共働きで、朝に弁当を作る余裕のある家族がない僕は、通常昼食は購買部で買うことになっている。そのために、ほとんど毎日昼食代を入れた財布を持ってきているのだ。が、木曜だけは、母親が遅出なので、僕も弁当持参になるのだ。そんなわけで、帰りがけに買い物をする予定がない場合、僕は木曜には財布を持たないで学校に来ているのである。

つまり、このままでいくと、僕は無銭飲食……？

背中を冷や汗が伝い、僕はぞくりと身震いをした。もしこんなことがバシたら店の人に怒られるし、親にも怒られるし、高校の教師陣にも怒られるだろう。しょんぼりな結末しか待っていない。果たしてどんな手段でこの場を切り抜ければいいのかと、混乱した頭で懸命に懸命に考えていると、僕の目の前には、何やら僕の焦燥に駆られた顔をニコニコと眺めている眩しい笑顔。そしてすつと

右手を差し出してきて、

「……さて、改めて聞いてみるけど、あたしのアシスタントになってみる気は君にあるのかな？」

この悪魔の囁きを突っぱねつつも問題をクリアする手段として、例えばこちらの店長に拝み倒してツケにしてもらうとか、はたまた代金の代わりになるようなものを置いていくとか、僕は自身に提案してみた。しかし、そんなことをしたって「それよか、その友達に借りた方がいいだろう」と言われるだけでおしまいだろう。さらに一分ほど熟考してみたが、さらなる良案は何も浮かばず  
結局、僕は諦めのため息をこぼしながら、

「……………お願いします」

と、しびしびその右手を握り返したのだった。



も驚きはしない。そんな人である。

そんな人なもんだから先輩は学校でも割かし有名人なのだが、当の本人は、その有名になった原因を「あたしが美人だから」という要素のみで理解している。そしてそう理解しているからこそ、周りからの歪な視線を意に介さず、自分の言動を省みることもないのである。「先輩が美人」というのも嘘ではないが、しかしこれだけがすべての真実ではないのも確かだ。ちゃんと現状を認識してもらおうと僕も色々と言葉を選びつつ説明したこともあったのだが、結局先輩は聞く耳を持ってくれなかった。どんなに言葉を並べようと、「要は、あたしが魅力的だからだろう？」という一言でばつさりと切られてしまうのである。ノレンを腕で押したつてもう少し手応えがあるものだろうに……。

こういった相互不理解を何度か繰り返していった結果、僕はようやくこの先輩が『バカ』であることを心の底から理解し、最終的には先輩の更生を諦めたのだった。今思えば、これほど無為な時間もなかったように感じる。

さて、ここまでつらつらと加賀野つくみ先輩の客観的な評価というのを書き連ねてみたが、実際のところ、僕自身がここまで先輩のことを理解したのは、今からもう少し後のことである。

今現在の僕は、学校の最寄り駅のホームで先輩から「あたしは加賀野つくみだ。よろしく」と自己紹介されてからわずか三十分後であり、喫茶店でわけの分からない話を聞かされてから十分後であり、ケーキを半ば強制的におごられてから五分後であり、つまりは先輩に手を引かれて学校へと続く商店街を歩いている最中なのだ。当然のごとくつくみ先輩のパーソナリティの字も知っているわけではない。そしてわからないからこそ、僕も僕で、このわけのわからない先輩にのほほんとしてきてしまったという部分もあるのかもしれないが。

駅から学校へと戻る道すがら（帰宅途中の同校生の波を逆流していくのが何とも気恥ずかしくなりながら）、僕は目の前の先輩に向かって、

「……あの、ところで、ちょっと聞きたいんですけど」

という前置きと共に、質問を一つ投げかけてみた。

「いや、先輩のアシスタントになることには同意しましたがけど、あの………何でまた、こんな日も沈みかかっている時間にもう一度学校に行かなくちゃならないんです？」

この疑問を聞くや否や、先輩はぴたりと立ち止まり、短くカットされた後ろ髪を揺らしながら、くるりと首を回して振り返ってきた。その顔は「何だ、そんなことも理解していないのか？」と言わんばかりの呆れたような表情であり、実際に

「何だ、君、そんなこともわかってなかったのか？」

と呆れたような声で言ってきた。

「だから、『ワールド・マテリアル』を探すために決まっているだろうが。あたしたちの目的はそれだけだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「それって、さっき先輩は全否定の表現だと言ってませんか？」

いや、それはいいとして、僕が聞きたいのは『ワールド・マテリアル』を探すために、何でこんな時間に学校に行かなくちゃならないのかということです」

「決まっているだろう。この『ワールド・マテリアル』は我が天神岬高校にあるという話だからだ。噂とはいえ、学校にあるという情

報があるというのに、わざわざ山やら海やらに出掛けるバカはいない  
「じゃなくって、何でこの『じ・か・ん』なのかってことを聞いてるんです！」

いい加減、僕は声量を大にして訴えた。

「もう夕方の七時ですよ、七時！ 空もほとんど真っ暗ですし、そろそろ夕飯時です。わざわざこんな時間に行かなくても、明日の昼休みとか放課後とか、もつと活動しやすい時間があるでしょう。今日は一旦帰るっていう選択肢はないんですか？」  
「ないな」

先輩は即答及び断言。

「我々の『ワールド・マテリアル』探しは、ようは早い者勝ちの真剣勝負なんだ。一秒たりとも無駄にはできない。おまけに、あたしのクラスは、明日の宿題が十分程度で終わる現代文の小問だけだからな。今日の夕方は、あたしには結構な時間があるのさ。このチャンスに逃す手はないだろう」

……いや、僕の都合は？

「何を言っている？ 君はアシスタントであり、あたしへの全面協力が仕事なんだ。あたしが行けと言ったら、君は火の中でも、水の中でも、富士の樹海の中でも、審議中の国会議事堂の中でも、ホワイトハウスの中でも、即座に行かなければならないのだ。つまり、君の命はあたしに譲り渡されたも同然なんだ」

僕の命を！ ケーキ一つで！

「……それに、君はやはりわかっていない。夜の学校というのがどれだけ素晴らしいシチュエーションなのか。そこがどれだけ幻想的で背徳的な場所なのか。日本人なら誰しも一度は憧れるスポットだ。しかも、そんな場所に、君はこれからこんな美人と二人きりで行くことができるというのに。一体君に何の不満があるというんだ？」

「……美人と書いて『あたし』と読む人を初めて見ましたよ」

僕は肩をがっくり落としながら嘆息した。

しかし、つくみ先輩は相変わらず僕の腕を引っ張りながら、

「さあ、理解したら、さっさと君の親御さんに今日の夕飯がいらない旨を伝えて、早速学校へと向かうぞ！」

商店街を歩く人々からの奇異な視線をまったく気にすることなく、大音量で言い切った。

その二十分後、僕達はようやく学校にたどり着いた。

辺りはこれでもかというほど闇色一色で、完全無欠の夜である。すでに閉まっている校門の鉄柱の間から中を覗いてみたが、ほとんど何も見えない。真つ暗な校庭の奥、周辺の住宅から漏れる明かりで、三階建て校舎がうつすらと照らされているだけである。

僕は校門から一步下がり、後方のつくみ先輩に向かって、

「……先輩、これじゃ何も見えませんよ」

「はっは。大丈夫だ。ちゃんと懐中電灯は用意してある」

「でも、そんな光をチカチカさせてたら、僕達がいることがバレちゃうじゃないです」

ここで、僕はようやく気付いた。

「……というか、そうですね！　そもそも、これ不法侵入じゃないですか！　校門も閉まってるし！　見つかったらシャレにならないですよ！」

「はっはっは。大丈夫、大丈夫」

つくみ先輩は腕を組み、余裕たつぷりな笑顔で三度頷いた。

「『見つかる』という事象が発生する要因というのは、何も『見つけられる対象がそこに存在すること』だけではないのだ。それだけでは『見つかる』という事象は発生しない。もう一つの要因が必要なのだよ。それはつまり、『見つける存在がそこにいること』なのだ！」



………はあ。

「要するにだね、我々が学校に侵入したとしても、『我々を見つめるもの』がそこには存在しないのだ。だから、我々が見つけれられ、叱咤を受けるといふ未来が実現する可能性はゼロなのだよ！ だから、君の不安は杞憂以外の何ものでもないのだ！」

「………ようは、校舎内にはもう先生がいないから、大丈夫だってことですね」

まあ確かに、先生がいなければ怒られないのは当然だろう。すでに七時半を過ぎてているし、校舎の明かりはどこもついていない。先生は全員帰ってしまったのだろう。

「運のいいことに、我が天神岬高校には宿直制度は存在しないし、帰りに裏庭の方の窓を一つ開けたままにしておいた。わざわざ窓ガラスをどうこうしなくても、進入が可能なように手配しているのだ。ほら、時間がもったいない。さっさと入るぞ」

「………わかりましたよ」

シッシと門をよじ登るよう促してくる先輩に、僕はやれやれと言わんばかりの声音で返事した。どちらにせよこれは不法侵入の一種であり、リスクが存在する行為ではあるのだが、まあ、国会議事堂やホワイトハウスへけしかけられるよりはマシだ。それに、キーキをおごってもらった借りもある程度は返しておかなければならない。そんなわけで、僕はよっこらせと校門の鉄柱に手と足をかけ、登り始めた。のだが、

「こらあああああ！」

突然、怒鳴り声が響いてきた。

次いで、僕の視界が急にまぶしくなる。

手で光を遮りつつその光源の方へ視線をやると、校庭の真ん中、懐中電灯をかざした人影がこちらに走ってきている。そのがっしりした体格と面長、スポーツ刈りのシルエットは何となく見覚えがある。うちの担任の五橋教諭だ。

「お前らあああ！　そこで何してるっ！」

影と足音と怒鳴り声がどんどん近づいてくる。

や、やばい！

僕は慌てて校門から飛び降り、教諭から死角になるよう、壁沿いに走り出した。前方を見ると、いつの間にか先輩は数十メートル先を走っている。僕を見捨てて一目散に先に逃げてたのか！　この薄情者！

僕もひたすら全力疾走。どうにか先輩に追いつき、右隣を併走しながら、

「せ、先輩！　見つかったじゃないですか！」

「ああ。まさかまだ教師が残っていたとは……。これは予想外だ」

「ど、どうするんですか！　捕まったら怒られますよ！」

「男の子が、何を今さら先生に怒られることを怖がっているんだ。みっともないぞ」

「じゃなくて、見つかったら親呼び出しは避けられないじゃないですか！」

「何だ？　親に怒られるのが怖いのか？　まったく、君も女々しいつたらありはしな」

「　じゃなくって、小遣いが！　僕の小遣いが！」

「……何だ、結局金の問題か。やれやれ、君も俗物なものだ。先刻喫茶店に誘ったらホイホイついてきたものだから、少しばかり危惧はしてたんだ。あれも結局、無料で飲食できることを期待してのこ

とだったのか。これで合点がいった」

「誘ったあんたが言わないでくだ」

「待あああてええええ！」

再び、後方から怒号。

首だけ回し振り返ると、五橋教諭が障害物走のようにひらりと校門を飛び越え、短距離走者のような走法でこちらに駆けてくる。さすが体育教師。やたらに速い。どんどん距離が狭まってきている。百メートルくらいあつたはずのアドバンテージが、もはや半分くらいしかない。このままじゃ、追いつかれるのも時間の問題だ。

「せ、先輩、どうするんですか！」

息も絶え絶えに、僕は先輩に解決策を催促した。

「あれ、うちの担任なんですよ！ 捕まるどころか、顔を見られるだけで僕はヤバいんです！ ど、どうにかならないんですか！」

「……やれやれ、しょうがない」

先輩は走りつつも、口をへの字にして苦笑いをした。そして壁の角にたどり着くと、九十度方向転換。またも壁沿いに走り続ける。

僕も慌ててそれに倣った。

再び五橋教諭が完全に見えなくなったところで、

「よしっ、ストップだ。ここで行こう」

突然、先輩が立ち止まった。

僕はわけもわからず急ブレーキをかけ、

「な、なに止まってるんです！ 早くしないと、お、追いつかれ

「いいから黙っている」

不遜な声でそういうと、先輩はおもむろに首の裏に手を持っていった。そして襟首のところからスルリと、何か細長いものを取り出す。暗いせいでその細部まではよくわからないのだが、目を凝らしてよくよく見てみると、見たことはあるが決して見慣れてはいないフォルムをしている。黒光りしている鞘に黄金色の鍔、そして縄を巻きつけたような柄。そう 見ると そう としか見えなくなってくるのだが、いや、まさか、そんなわけないと思いつつ、とりあえずの確認として、僕は、

「……それ、もしかして刀ですか？」

「はっは、そんなわけないだろう」

「あははははは。そりゃそうですよねえ。そんなわけないですよえ。分かってましたけど、一応言ってみただけです。あははは。まさか、先輩がそんな凶器を所持してるなんて、そんなわけ」

「これは小太刀だ」

先輩は至極誇らしげな顔で、そのブツを見せびらかせるように僕の顔に近づけてきた。

「ここまで反っている刀が打刀であるはずもなかつた。それに、明らかに短いじゃないか。太刀でさえ、あたしの背中に入りきるわけがない」

余談だが、この時点でようやく僕は、この加賀野つくみという先輩が、冗談なんかでは済まないほどにヤバいということを確認したのだった。この瞬間に逃げ出していればもしかしたら間に合ったのかもしれないが、そんな発想すら浮かばないほど、この時の僕

の脳はフリーズしていた。

「まったく、そんな見分けすらつかないとは。ここで君に日本における刀剣の発展の歴史を講釈してやりたいところだが、いかんせん今は時間がない。さっさと行くぞ」

「……………い、行くって、どこへ？」

「反位相の世界 だ」

「……………はんいそー？」

僕はオウム返しで尋ねた。

しかし先輩は僕の疑問を聞き流し、そのままその小太刀を頭上に振りかざす。そして僕がポカンと眺めている目の前、何の前置きも説明も無しに、先輩はその刃をまっすぐ振り下ろした。その鋭い剣筋とびゅんという風切り音にもびっくりしたのだが、それ以上に僕が驚いたのは、なぜか、なぜか

剣筋の軌跡が、青白く光り輝いていること。

明らかに、空中たるその 部分 が光を放っている。頭を動かして色々な角度で見てみたが、間違いなく空気が輝いている。まるで火の玉や蛍の集合体のように、光が宙に留まっているのである。

「……………え？ こ、これ、なんですか？」

「説明は後だ。早くそこをくぐれ」

「くぐるって、こ、ここをですか？」

「そうだ。早く。時間がない」

「いや、くぐるって言っても、一体何が

「早く 行け！」

「いたあー！」

これ以上ないほど不親切に背中を蹴り飛ばされた僕は、勢いそのまま、

その青白い光の中へと入っていったのだった。

そこは、真つ暗な世界だった。

いや、『真つ暗』というなら、さつきまでの世界だって『真つ暗』は『真つ暗』だった。太陽が地平下に沈んでいた、正真正銘の夜だったのである。……しかし、ここはそこよりもさらに暗い

周辺の民家から漏れていた光がまったくくないのだ。僕の視界はもはや、月や星の光だけで保たれている。

そして、違いはそれだけだった。

右を見ても左を見ても、ここから見える景色はさつきと全く変わっていない。学校の塀。電柱。アスファルトの道。排水溝。向かいの三階建てマンション。その隣のクリーム色の家。月明かりで辛うじて見える風景は、写真を撮って三百六十度張り合わせたかのように、寸分の違いもなかった。

「 どうだ？ 驚いたか？」

不意に、背後からつくみ先輩の声がした。

僕が振り返ると、先輩はしてやったりというような微笑でそこに仁王立ちしており、

「こここそが、あたしが言っていた 反位相の世界 なのだよ」

「……はん……いそう」

「うむ、そうだ」

先輩は髪をわずかに揺らして、仰々しく頷いた。

「そのリアクションから察するに、君はまだ『位相』という概念を理解していないのかな？ 物理の授業ではまだやっていないのだっ

け？ だつたら説明の必要があるな。ええと、まず、この世界には『波』というものが

「 というか、ちょっと待ってください！」

僕はハツと我に返り、膝立ちから立ち上がった。

「 僕ら、さっきまで追いかけてた途中じゃないですか！ は、早く逃げなくちゃ」

「 あつははは。逃げる必要なんてないんだよ。ここは 反位相の世界 なんだから」

「 で、でも、この世界……見た目は同じ……なら……せ、先生も」

「 あの教師は、この世界に存在しないのだよ」

先輩は僕をなだめるような、あるいは僕に言い聞かせるような口調で言ってきた。

「 いや、あの教師だけじゃない。この世界にはほとんどの人間が存在していない。それ以外の物質はまったく同じなのだがね。だから、この世界が先刻の世界と瓜二つだったとしても、ここであたし達が追いかけられる心配はないのだよ」

「 ……そ、それが、 反位相の世界 ？」

「 ああ、そうだ。 ……しかし、少々驚いたな。君がそんな簡単に『異世界にたどり着いた』という現実を受け入れてしまうとは。もう少し疑うか、錯乱するかすると思っていたんだが。少々期待外れだ」

……そりゃ、まあ、わけのわからない先輩に半強制連行された拳句に、小太刀で空中に光の落書きをされた後じゃあ、僕の常識感もショートしてますよ。



「まあ、いい。とにかく時間がもつたないし、早く校舎の中に入ろう。歩きながらも話はできる」

話を総じるように言って、すたすたと壁沿いに歩き出す先輩。

僕も僕で、せん無くその後についていく。ついていきながらキョロキョロとあちこちを見してみるが、やはり見覚えのある町並みだ。似ているなんてレベルではなく、まったく同じなのである。まるで大停電が起こってさらに騒音禁止条例でも発令されたかのような、ただただ暗く静かな世界。ここまでくると不気味さすら感じる。

「……さて、君にとっては初めての 反位相の世界 となるわけだが」

僕の前を歩きながら、先輩は場違いなほど明朗な声で話しかけてきた。

「あたしは人の気持ちかわかりすぎて困っているぐらいにわかる人間だからね。君の戸惑いもひしひしと感じているよ。あたしのアシスタントとしての職務をパーフェクトにエレガントに全うしてもらうためにも、君の心情は常に安寧であってほしい。そんなわけで、優しく美しいこのあたしが、人生最大の戸惑いに苛まれている最中である君のため、これから君の質問に親切丁寧に答えてあげよう」と、その前に、こちらからも一つ質問してもいいかい？

「……………何ですか？」

先輩のセリフの中に複数あったツツコミどころを全て流し、僕は割り合い素直に聞いた。まあ、先輩とは知り合って一時間程度だし、僕について知らないことも色々あるのは確かだろう（僕だって、つきみ先輩については名前と学年と大体の性格くらいしか知らないの

だ)。趣味でも特技でも好きなタイプでも、何でも素直に答えてあげようという誠実な心根で待っていた僕にかけられた、先輩からの最初の質問

「君の名前は、何かな？」

「……………え……………え……………ええええええええええつ？」

い、今さらその質問かよ！

「ちょ、ま、待ってください。あなた、僕の名前も知らずに僕をアシスタントに誘ってきたんですか！ んあアホな！ ……いや、でも、そう言えば、確かに、僕はまだ一度も先輩に名乗ってませんでしたけど。それに、さっきから僕のことには『君』としか呼んでなかったし……………で、でも、僕の名札見てたじゃないですか！」

「そんなちっこい字が読めるか。あたしは最近近視になりかけてるんだ」

先輩は胸を張り、両手を腰に当て、憚然と言いつつ放った。

「それに、先刻のシチュエーションでは、その名札には君の学年を知るためのツールという役割しかなかったのだ。今現在において、やっと君の名前を表すためのアイテムとして体をなしたのだよ。だから、あたしがその名札で君の名前を確認していなかったといつて、あたしが責められるいわれはない」

そんなバカな……………。

「というわけで、単刀直入に答えたまえ。君の名前は何か？」

「……………あさかぜたかし朝風崇です」

僕はずっしりと肩を落としながら回答した。……この地球上に、これほど不条理感たつぷりな自己紹介が今まであっただろうか。しかし、先輩はそんな僕の煮え切らない想いを気にするでもなく、

「で、その朝風君。初めてこの 反位相の世界 に足を踏み入れて、何か質問はあるのかな？」

「……そりゃ、いくらでもありますよ」

僕は心持ちぶすつとしつつも、たとえ僕がアリンコだったとしてもミジンコだったとしても宇宙人だったとしても最初にしたであろう質問を先輩にぶつけた。

「まず、この 反位相の世界 ってのは、一体何なんですか？」

「反位相になってる世界だ」

質問が終わってしまった いやいや、僕の疑問については何一つ終わっていない。

「だ、だから、その『反位相』ってのは何なんですか？」

「ぶつむ、やはりそこからの説明が必要か。まあ、いいだろう。手間だが、あたしが詳しく教えてしんぜよう ときに、朝風君、君は『波』というのを知っているか？」

「波って……あの、海でザブーンっていつてる奴ですよね？」

そんな、バカにしないでください。僕だってそれくらい」

「 違う。物理的な意味の『波』だよ」

先輩が振り返り、ジトーツと僕を睨んでいる。僕が「へ？」と呆けた声を上げると、先輩は鼻を鳴らしながら、

「この世界には、『波』というものはいくつも存在している。君が

言った海の波もその一種だし、音、電気信号、光、地震、そして原子の周りを回る電子も波を形作っている」

……………はあ。

「気の抜けた相槌だなあ。もしかして、君は数学や物理が苦手なのかい？ だとしたらアシスタントの人選を誤ったなあ。『ワールド・マテリアル』探しに不向きなことこの上ない。まいったなあ。後悔がいつも先に立たないのは史上最大の謎だよ、まったく。……………まあ、なってしまったものは仕方がない。講義を続けるぞとにかく、だ。この世にはいくつもの『波』が存在している。そして、その波の形が間逆になっているのが、あたしが言っている『反位相』というやつなのだよ」

波の形が、真逆？

「そうだ。まあ、厳密に言うとは違っただがね。簡単に理解しようとするれば、そういう説明になる。例えば、君が最初に言った海の波をイメージしてみる。それは一体どんな形をしている？」

海の波、ですか？ えっと……………上下にウネウネとうねってま

「そうだ。その上と下が逆になることが、すなわち『反位相』なのだよ。しかして、波が反対になったところで、世界に変わりはない。例えばプラスがマイナスと呼ばれ、マイナスがプラスと呼ばれていたって、実質的には何も違いはないだろう？ 呼び方を変えればいいだけなんだから。『一足す一』が『一引く一』と発音されるだけで、差異はまったくない。それと同じとき。波の形がすべて真逆でも、それだけで、世界自体はまったく同じになるのだ」

……そ、それが、この 反位相の世界 ？ うゝむ、何だか、わかったようなわからないような……。

僕は無理矢理納得させられたような気分になりつつ、「へえ、そうなんですか」と生返事をした ところで、

僕はようやく校門にたどり着いた。

やはり、その外見はほとんど変わっていない。周辺住宅からの光がなくなった分、闇にまぎれている部分は多くはなっているが、しかし相変わらずのただっ広い校庭と、その奥に佇む真四角な鉄筋コンクリート建造物だ。校庭には雑草が生え渡っており、校舎の壁も少し汚れがひどいような気もする。しかし、それらもそこまでではなく、僕が平日毎日眺めている我が学び舎そのものである。

校門を昇り降り、塀の中を隅から隅まで眺めてみたが、やはり五橋教諭はいない。僕は改めて安心し直しつつ、

「しかし、先輩、一つ気になったんですけど……」

「ん？」と振り返ってくる先輩。

「どうして、五橋先生は学校にいたんですかね？ だってほら、先生、懐中電灯持ってたじゃないですか。あれは、明らかに見張りをしていたようにしか思えないんですが……」

「そのことが。……実は、あたしも一つ思い出したのだ」

前を向き直した先輩は、腕を組んで思い悩むように顔を傾けた。

「実は一昨日、あたしがここに侵入した際、ついでに保健の由紀子先生の机に小さく『アホ』と落書きしたのだ」

「……………へ？」

「恐らくだが、それがきっかけとなって、この高校に夜の侵入者が

あつたことを教師陣に知られてしまったのかもしれない。そのせいで五橋教諭は校庭にいたのだろう。やれやれ、まったく、タイムイングの悪い。困ったものだ……」

「け、結局あんたのせいだったんかい！」

僕はこれでもかというほど気持ちよくツッコんだ。

「あ、明らかにそれが原因じゃないですか！ そんなん、バレるに決まってるじゃないですか！ んなことしてくれたおかげで、僕まで先生に追いかけられるハメに！」

「いや、しかし、由紀子先生も由紀子先生なのだ」

先輩は人差し指で僕を指し、片眉を吊り上げ、諭すように言ってきた。

「この前、身体計測があつたらう？ その時にだな、あの保健教師保健担当であることをいいことに、あたしの計測結果を見やがったのだ。しかも、言うに事欠いて、『うふふ。さすがの天才加賀野さんも、体の発育の成績は平均以下なのね』などと言ってきたのだ！  
こんな横暴、許されると思うか！」

拳を振り上げ、空気を殴りながら熱弁してくるつくみ先輩。その時の激情を思い出してきたんだらう、口調が段々ヒートアップしてくる。

「違うのだ！ あたしの時だけ、計測担当の人が、やたらにきつくメジャーをあてがってきたのだ！ 苦しいくらいに締め付けてきたのだ！ だから、結果が小さく見積もられて当然なのだ！ 結果が思わしくなかったのはそのせいなのだ！ 実際のところ、あたしの成績が平均以下などということはない！ 断じてない！ 何なら、

今から保健室へ行って、君自身が直々に測定してくれても構わないぞ！ その代わり、『加賀野つくみは決して成績不振ではない』旨を君の周囲の人にきちんと証明してく」

「遠慮します！」

僕は丁重に断った

そんな変態行為および変態発言、冗談

じゃない。僕の良識が疑われる。友達がいなくなってしまおう。

僕は嘆息しつつ、なおもぶつぶつ「……そもそも、あたしはまだ十七だ。まだまだ未来に可能性が」などと言っている先輩を追い越し、校舎の玄関の前に立った。昼間あれだけ騒がしいこの場所も、この時間では　そして、この　世界　では　静穏だった。無機物の匂いしかない。見た目は同じなのに、もはや別物にしか感じられない佇まいだった。

僕は扉に手を当て、はたと気づき、

「……そうだ。そういえば、先輩が開けといたっていう窓はどれなんです？　そこからじゃないと入れな」

「はっはっは。その心配はもうない」

先輩はすたすたと前へ歩み進み、僕の隣で扉の取っ手に手をかけた。そしてぎいと、その扉を押し開き、

「この世界は、別にあちらとリンクしているわけじゃないんだよ。

そんな心配はご無用。

さあ、早速『ワールド・マテリアル』

探しを開始しよう！」

この学校の先輩方が各々チームみたいなものを作り、『ワールド・マテリアル探し』をしていることは、僕自身も高校入学当初から知っていた（というか、それを知らずに天神岬高生でいるのは不可能だろうというくらい、校内において周知の事実だった）。しかし、僕はこの二年間、そのようなチームに属したことは一度もなく、その活動に身を投じた経験は皆無。新しい友人にも参加者はおらず、話を聞く機会すらなかった。そんなわけで僕は、『ワールド・マテリアル探し』というものが具体的にどういうものなのか、実はまったくと言っていいほど知らなかったのである。

おまけに、ついさっき空中に刀で落書きをするというわけのわからないパフォーマンスを見せられたばかりであり、現在も 反位相とかいう異世界を歩いている最中であり、その『ワールド・マテリアル』の探査方法はこういうものか、どんな超能力を見せられるのか、もしくはどんなハイテクなセンシングマシンを見せられるのか、僕は人知れずうずうすと期待していたのが正直なところだ。

が、

校舎内に入り、僕が最初に見たつくみ先輩の姿と言うのは、何もかんとも簡素でお粗末で、逆の意味で驚き呆れてしまうものだったのである。即ち 鉄の棒きれを両手に一本ずつ握り、とことと歩いているのである。

その棒きれはL字に曲がっていた。

隣を歩きながらちらりと先輩の顔を見ると、その表情は真剣そのもの。どこぞの油絵に描かれていそうなその端正なルックスが、いつにもましてきつと引き締められている。どこをどう見ても、ツツコミ待ちのような素振りには微塵もない。

一階の廊下を端から端まで歩ききったところでついに忍耐の限界が来た僕は、恐る恐る隣の先輩に声をかけた。



「……え、と、あの、つくみ先輩？」

この呼びかけに対して「今は作業中なんだから不用意に話しかけるな」と言わんばかりの横目で睨んできた先輩に、僕はさらに思い切って尋ねる。

「ええと、すみません……………先輩は、今、何してるんです？」  
「……………はあ、やれやれ」

先輩は横目で僕を見ながら、わざとらしいほど大仰に溜息をついた。

「これだから最近の若人は困る。まこと勉強不足だ。こんな基礎知識すら知らないとは。まったく。あのな、これは」

先輩は一拍間を取り、ずいっと僕を見てきて、

「ダウジングだ」

「いや、それは知ってるんですがね……………」

「……………ふむ？　なんだ、知っていたのに尋ねてきたのか？」

「ええ。知ってはいたんですけど、信じられなかったというか、ね  
で、先輩は、そのダウジングでもって、一体何してるんです？」

「決まっているだろう！　『ワールド・マテリアル』探した！」

「……………ですよねえ」

僕はきりきりと痛くなってきたこめかみを押さえた。

「……………というか、そもそもダウジングって、地下水脈とかを見つけ

る手法ですよ？ そんなもので見つかるものなんですか？ 『ワールド・マテリアル』って？」

「……ふん。そんな確証があれば、我々はここまで困っていない」

足を止めることなく廊下をぺたぺた歩きながら、むっつりとした顔で答えてくるつくみ先輩。

「そもそも、『ワールド・マテリアル』というものの自体が未知のものなのだ。誰にも知られていないのだ。だから、どんな形なのか、どんな色なのか、どんな匂いなのか、どれくらいの大きさなのか、そしてどんなものに反応するのかということすらわかっていない。探す指針すら発見できていない。先週までは『センシング・K・メソッド』を用いていたのだが、二週間やって成果が出なかったもんだから、昨日から方針転換したところなのだ」

「……その『センシング・K・メソッド』っていうのは？」

「つまり、大きな紙に五十音と数字、そして日本神教を象徴した図形を記しておく、その上にコインを乗せ、キーワードを口ずさみながら」

「ああ、『こつくりさん』ですか」

「……あれも一応、センシングと言えばセンシングなのだろうか？ うーむ……。まあ、そんな安直なもので見つかってちゃ、世界中のオカルト学者も雑誌編集者も報われないだろうけど。」

「……でも、先輩。そんな空中に落書きできる刀持ってるんですから、もっと、こう、なんか、不思議な力でスパーツと探せるようなそういう、なんか、こう、もっと、なんか、無いんですか？」

「君が何を求めているのか、あたしにはいまいちよく伝わってこんが……」

つくみ先輩は僕の方に一瞥をくれ、

「しかし残念ながら、先刻の能力はあくまでこの場所に来るためだけのものらしい。あたしも当初は色々試してはみたが、他にはどんな特性も示さなかった　　ふん、もしかしたら、他の奴らの能力の中には、このサーチングに特化したものもあるのかもしれないが……。だとしたら、逆に危険だ。そいつに先を越される可能性が高くなってしまおう」

最後は僕に聞き取れないくらいの声でぶつぶつと独り言をこぼしながら、ダウジングを続けていくつくみ先輩。

「……ん？ 『他の奴ら』？」

それってつまり、つくみ先輩の他にも、そういう変な能力を持つてる人がいるってことですか？　　と僕が尋ねようとした、

その瞬間

ひゅんっ

風切り音が聞こえた。

どこかから隙間風でも入ってるのだろうかと呑気に僕が視線を上げたのと同じ、眼前のつくみ先輩が刀を鞘ごと振り上げた。

きんっ

甲高い金属音が教室に鳴り響き、いきなり目の前に火花が散った。次いで、暗闇の中、黒い影が僕と先輩の間にすたと降り立つ。

その影の大きさからそいつが人間であることによようやく思い至った僕は、慌てて懐中電灯を　そいつ　に向けた。

その黄色い円形の光に照らし出されたのは、うちの高校の制服を着た男だった。短髪をワックスで逆立てていて、トラのような釣り

上がった小さい目。僕より少し上背は高く、その右手にはやや大きめの 草刈り鎌 が握られていた。

そいつの風体を一秒ほど瞳に映し続け、僕はこの人に見覚えがあるのを思い出した。そう、この人は確か つどなかそつたい うちの高校の風紀委員長、都度中壮大先輩だ。

全校集会なんかで、時たま教師の横に立っている先輩。以前一度か二度、風紀委員からのお知らせという名目で、体育館の壇上にも立ったこともあった。歳は一つしか違わないのに、思わず目を伏せてしまいそうになるほど尊大な話声だったのを覚えている。

……というか、この人、今、つくみ先輩に鎌で斬りかからなかったか？

今のは見間違い、聞き間違いだったのかと首をひねっていた僕の目の前、その都度中先輩は、両手を腰に当て、

「……やれやれ、加賀野、やはりお前か」

さざ波のような声で呟いた。

「ここには他にも何人が侵入してきているが、お前が一番頻度が高い。まったく、『ワールド・マテリアル』なんて眉唾物を理由に校内に刀を持ちこまれては、こっちとしてはたまったもんじゃないぞ」  
「『ワールド・マテリアル』は眉唾物なんかではないと言っているだろう！」

つくみ先輩はたれ気味の眉を吊り上げ、廊下中に響き渡るくらい  
の声で叫んだ。

「現に、我々だって今こうして異世界に足を踏み入れているという  
事実はどこにあるのだ！ それはつまり、この場所には何かしらの  
超的要因が存在することのれっきとした証拠ではないか！」

「……その論理は飛躍している。たとえここが異世界だとしても、それが『ワールド・マテリアル』の存在理由　　ひいては、お前が日本刀を振りまわす理由にはなっていない。俺だってお前を警察に通報などしたくはないんだ。風紀委員として、同校生から犯罪者をだしたくはないんだ。だからそろそろ観念しろ。その小太刀をこちらに引き渡し、二度とここに立ち入らないと誓え　　とい  
うか、おい」

ここで、急に都度中先輩は僕の方を振り返ってきた。その黒目の小さな眼で見据えられ、僕は思わず肩を震わせてしまう。

「加賀野、何だ、このガキは？　うちの生徒のようだが」

都度中先輩の質問に、つくみ先輩は急ににやりとどや顔になった。そして両腕を胸元で組み、胸を反らして、

「ふん、彼こそ、本日より未来永劫、何万回と生まれ変わろうとも変わらず、あたしの下僕として骨身を惜しまず働くことを心に決めた我がアシスタント、朝風君だ」

……ツツコミどころ、不満点、不明点は数知れなかったが、状況が状況だけに僕はツツコめなかった。

都度中先輩は再度ぎよろりと僕の方に一瞥をくれ、

「お前のアシスタント？　こいつが？　やれやれ、まったく……」

気疲れしたかのように両肩を落とした。

「これでも、お前は同学年の中でも分別があるほうだと思っていたんだが。しかしまさか、わざわざこんなモヤシ男を引き込むとは。」

いよいよヤキが廻ったか？ 体格もヒョロいし、頭も回らなさそうだし、おまけに気が小さいのは見ただけでわかる。こいつより使えそうな人間なんか、うちの高校にもあと五百人くらいはいるだろうに」

……五百つて、そりゃもう、全校生徒では？

「ふん。その点は否定せんが、あたしは彼の『身も心も命も財産もすべて無条件で加賀の先輩に差し出すことを天に誓います』という忠誠心に心打たれたのだ」

言っていないし！

「今のお前の状態は、迷走以外の何物でもないな。存在するかどうかわからんものにそそのかされ、時間と才能を無駄にしている。

……加賀野。今からでも遅くない 風紀委員に入れ」

都度中先輩はその短髪をさらりと掻きあげ、暗闇の中でも輝いて見えるほどの鋭利な眼光で睨みながら言ってきた。

「そのちゃらんぼらんな性格を除けば、俺はお前をそれなりに評価している。特に三年前の、まだ世界への虚無感、虚脱感を擁していた頃のお前は、類まれなほど優れ特化し秀でた存在だった。俺が矯正してやる。だから、俺の下につけ。お前はこちら側にいるべき人間だ」

「……何度も言わせるな」

鼻を鳴らしながらむすつと答えるつくみ先輩。

「あたしはもう三年だ。あと何カ月もこの学校にいられるわけでは

ない。そんな人間がわざわざ今から風紀委員に入ったところで、できることなどたかが知れている。それこそナンセンスな人事だ」  
「その数カ月の間でも、お前なら相応のことができる。そう確信している。それに俺個人としても、お前という存在にはぜひこちらにいて欲しいと思っている。だから」  
「そ・れ・に」

都度中先輩の言葉を遮り、つくみ先輩は語気を強くして言葉を続ける。

「あたしは『こつち』の方が好きだ。好きなんだ。だからあたしはこつちという行動を取る。そこには誰の責任も咎も因果もないさ」  
「……ふん、やはり返事は変わらんのか。ならば、仕方ない」

都度中先輩はすつと右手を振り上げた。そこに握られているのは、鈍く輝く銀色の鎌。

「排除する」

第一話『Another Phase』

その四（後書き）

2010/12/31 第一話 その四『丸々書き直しました、  
すみません……。』



第一話『Another Phase』 その五

「しゃがめ!」

つくみ先輩の大声に、僕は反射的に身を屈めた。

スパツ

そんな音と共に、頭頂部に微風が当たる感覚と、後ろ髪を軽く引っ張られたような感触がした。恐る恐る振り返ると、僕の背後の机の上に、さつきまで都度中先輩の右手に握られていたはずの草刈り鎌が、まるでチーズにナイフを突き立てたように深々と刺さっている。

「……え? な、な、な?」

僕はへなへなと、床にへたり込んだ。

「ちょ、へ? え……今、都度、中、先輩、鎌、僕に……投げ? え?」

「……まあ、そう怖がることでもない」

あくまで落ち着いた声で言いながら、都度中先輩は紐でも手繰る様にくいっと右手を動かした。それに呼応して、僕の背後の鎌が机から引き抜かれ、空中をくるくると飛び、都度中先輩の手元へと返って行く。

「俺は風紀委員長だ。そんな凶器を持ち歩くわけないだろう。加賀野とは違っさ。鎌とはいえ、これはちゃんと刃引きされている。だからまあ、当たったところで痛いだけだ。切れて血が出ることもない」

……いやいやいやいやいや、そのスピードの投てきじゃ、そんな変わらないんじゃない？ それに今、明らかに机に刺さってたし……。  
そう心の中で思いながらも口を動かさないと、僕の横につくみ先輩が一步踏み出してきて、

「切れはしないかもしれないが、それ以上に厄介なのが貴様の鎌だろう？ 都度中」

と不遜な声音で言う。言いながら前屈みになり、臨戦体勢のような構えで都度中先輩に相對している。

「その鎌の能力、即ち 『斬った対象を反位相の世界の強制的に飛ばす』か。ふん、次元の移動は見た目以上に体に負担がかかるからな。今ここで元の世界に返されたら、再びここに来るのは十分な休息を取ってから。つまり、今日の『ワールド・マテリアル』探しがお開きになってしまう。……やれやれ、迷惑極まりない、鬱陶しい能力だ」

心底うんざりしたように言うつくみ先輩      しかし、その口元はなぜか、どことなく嬉しそうだった。キツと閉じられていながらも、頬はわずかに緩んでいる。まるで、「こういうライバルがいなければ人生楽しくないだろう」とでも言うような……。  
つくみ先輩はその体勢のまま、声だけで、

「朝風君！ さあ、早く逃げたまえ！」

「え？ え？ 逃げ……」

「早く！」

「う、ああ、は、はい！ わかりました！」

僕は慌てて立ち上がり、くると回れ右。そのまま後方へと走り出した。

「……逃がすわけなからう」

都度中先輩の独り言のような声が聞こえたかと思うと、たたんと床を蹴る音がした。走りながらちらりと横を見ると、僕の真後ろ、草刈り鎌を振り上げた影が迫っていた。

「うえ？ ……うわっ」

足がもつれ、床に転ぶ僕。床に伏しながら思わず目を閉じ、顔を腕でかばった。しかし、

きんっ

響いたのは金属音。目を開けると、小太刀でもって鎌の斬撃を受け止めているつくみ先輩が、僕を庇うように立ちはだかっていた。小太刀と鍔迫り合いをしている都度中先輩の鎌の刃渡りに、うつつすらと青白い光が見える。つくみ先輩の小太刀の時と同じような淡い光。やはりこれも、あれと同じような能力

「さあ、早く立て！」

切羽詰ったような声音で叫ぶつくみ先輩。次いで、ぶんと都度中先輩の鎌を振り払った。

都度中先輩は一旦後ろへ飛びのいたが、着地するとすぐさま前へ駆け出し、つくみ先輩の右肩を狙って鎌を振りかざす。

しかしつくみ先輩は、目の前で小太刀を十字に振り切った。都度中先輩の顔の前で刃が空を切る。空中に、白い光の十文字が灯された。

それに鼻先が触れそうになった都度中先輩は急停止。振り上げていた鎌を引き、横っ飛びでそれを回避して、

「……ふん、貴様こそ鬱陶しい能力を持っている」

「ははは、お前ほどじゃないさ」

笑いながら、つくみ先輩はさらに小太刀を振り回した。刃を振るごとに白い軌跡が一本ずつ増えていき、最後にはつくみ先輩の眼前に、幅、高さが三メートルくらい大きな真っ白い壁が出来上がった。

「ははははは！ 名づけて『フーちゃんバリアー』！ どうだ！ これで貴様はここを通れまい！」

つくみ先輩は、白い壁の向こう、ぼやけて見える都度中先輩のシルエットに向かって捨て台詞のように叫ぶ。そして僕に「さ、行くぞ！」と促しつつ、そのまま後ろへ走り出そうとした。その瞬間がしゃんつ

金属がぶつかったような音が四方から聞こえ、僕は驚いて顔を上げた。見ると、僕の目の前と左右に鉄板みたいな物が落ちてきている。それが床に達した瞬間にガチャアアアンツという耳障りな音が響き、地面が少し揺れた。何事かと思い、再度ぐるりと周りを見渡すと 金属の鉄格子、そして金属の天井が僕とつくみ先輩を覆っている。

牢屋か、これは？

半ば放心したまま床に伏していると、鉄格子の向こうに都度中先輩が立っていた。何でこの人が目の前に、と思ったが、ふと見ると、フーちゃんバリアーの下の隅にいくらかの隙間があった。恐らく、都度中先輩はあそこをくぐってきたんだろう。隙だらけじゃないか、フーちゃんバリアー！

「できれば、これを披露するのはもう少し後にしたかったんだがな」  
格子の隙間から僕たちを見下ろしている都度中先輩は、不承不承と言ったように言ってくる。

僕の隣、床に片膝をついたつくみ先輩は苦々しい表情で都度中先輩を見上げ、

「……まさか、こんなトラップを用意しているとはな、都度中。なかなか気合が入っているではないか。まさか、これも風紀委員の委員会予算で作ったというのか？」

「まさか、そんな金があるわけないだろう。これは私費で用意したんだ」

都度中先輩の声が止んだところで、かつんかつんと、ハイヒールを鳴らしたような足音が聞こえてくる。そして七歩目が聞こえてきたところで、都度中先輩の隣、女子制服を着た別の生徒が、窓から差し込む月明かりと、つーちゃんバリアーの白い光に照らしだされた。

「うふふ。どうも、お初にお目にかかります。私、風紀委員書記、三年の月乃宮つきのみやと申します」

鈴虫のようなきれいな声だった。栗色の髪がレースのカーテンのように真っ直ぐに肩の下まで垂れていて、目も耳も鼻も口も小さく慎ましか。人形よりも艶やかなんじゃないかと思えるようなその顔を見て、僕は思わず、

（きれいな人だ）

と心の中で呟いてしまった。

この心の声がどこから漏れていたのか、その直後に後ろからび

しつとチョップが飛んできて、

「なにをデレーっとしておるっ」

と、つくみ先輩がぶすつと言ってくる。

月乃宮先輩はそれを見てくすりと笑うと、

「うふふ。あなたが加賀野さんですよ。お噂はかねがね伺っておりますよ。美しさと聡明さを兼ね備えた我が高生徒全員の憧れ、クラスメイトも皆かしくずにはいられない至高の人間、『ワールド・マテリアル』に最も近い存在、加賀野つくみ嬢。こうしてお目にかかれて、感激の極みですわ」

「いやー、それほどもー」

頭をぱりぱりかき、ほつぺたを橙色にして香気に照れているつくみ先輩。

「……しかし、その至高の存在たるあたしを捕まえるためとはいえ、ここまでのトラップを作るとは。一体どうしたのだ？」

「ええ、私自身のコネを使わせていただきました」

「君のコネ？ 月乃宮というその苗字。まさか………月乃宮財閥」

「はい、父に相談させていただきました」

につこりと優雅に微笑む月乃宮先輩。

隣の都度中先輩はむすつとした顔で、

「ふん、俺はやり過ぎだといったんだがな」

「あら、そんなことはありませんよ、委員長。『G・O・W』も動き出しているという話なのに。もはや、やって遅いことなどありません」

「まあ、あまり時間が無いのも確かだがな……」

都度中先輩は難しそうな表情で一つ頷いた。

この御三方の会話の中、一つ解らない単語が出てきた僕は、そりつとくみ先輩の耳に顔を寄せ、

「……えと、先輩、『G・O・W』って何です？」

「ああ、『G・O・W』は『Guard Of Worldmateria』の略だ。ようは『ワールド・マテリアル』の守護を目的とした非政府組織だよ」

「……はあ、そんなのが存在するんですねえ」

言葉面からだけではまったくイメージがわからなかったが、とりあえずのところ僕は頷いておいた。

「さて」

都度中先輩は月乃宮先輩から僕ら二人に視線を移すと、まるで体育館の壇上にいる時のような、尊大で高圧的な声で言ってくる。

「ともかくも、これでお前らの進路も退路もすべて絶った。ここで餓死したくないなら、お前らの取る手段はあと一つしかないわけだ。そのお前の小太刀で、自主的に元の世界に帰るしか、な」

「……うぬぐぐぐ」

都度中先輩を見上げ、ぎりぎりど歯軋りするつくみ先輩。

都度中先輩はその表情を見下ろし、勝ち誇ったかのようににやりと笑うと、くるりと方向転換。

「では、あとはせいぜい好きにするがいい。あっはっはっはっはっ

「は

と高らかに笑いながら、すたすたと廊下の向こうへ立ち去っていく。

月乃宮先輩もそれに付き従うように歩いて行ってしまった。

二人の姿が完全に見えなくなったところで、

「……………ううおのりええええ！ つ、次はこうはいかんぞ！」

と、つくみ先輩は拳でもってがしゃんと鉄格子を叩いた

そしてそのまま「……………いたい」と手の平を抱えて、その場につづくまっってしまったのだった。



## 第二話『Enemy』 その一

「まったく、気に食わん、気に食わん、気に食わん！ この上なく気に食わん！」

風紀委員によって僕達が 反位相の世界 から強制退場させられた翌日の昼休み、つくみ先輩は僕の目の前で、口からポロポロとご飯粒をこぼしながら憤っていた。

僕はただただ、やるせない気持ちでその様を眺めている

それというのも、結果として汚されているのが他ならぬ僕の机であり、『これ』を掃除するのは必然的に僕になるんだらうという確信に近い予測があったからである。この先輩が掃除を手伝ってくれる未来なんて、僕がFBI長官になっている三十年後以上に想像できない。

それに、このやるせない感情の原因はそれだけではなかった。

さつきから僕に注がれるクラスメイトの視線がちくちくと痛いのである。少し離れたところから何人もちらりちらりとこちらを振り返っているし、購買部から帰ってきたクラスメイトが教室のドアを開くたび、また一つ、また一つとその視線が増えていく。僕達の周り席三つ分くらいは完全に無人になっていて、まるで離れ小島に漂流しているような様相になっているのである。

……まあ、無理もない。三年の先輩がなぜか、我が物顔で二年生の教室に陣取っているのだ。

おまけに、それが『あの』加賀野つくみ先輩なのである。ある所では才女、ある所では変人、ある所では男性陣の憧れの的、またある所では厄介さんたる有名人だ。僕だつて向こう側の立場だつたら何事かと眺めてしまುದらうし、思わず距離を取ってしまうのも無理からぬことだろう。誰を恨むこともできない。

この後みんなにどんな釈明をすればいいのかと頭を悩ませながら、

黙々と弁当を口に運んでいると、

「なあ、おい！ 朝風君もそうは思わんかった？」

二本の箸で僕を指しながら、つくみ先輩が聞いてきた。その唾と一緒にご飯粒まで僕の弁当に入りそうになり、僕は慌てて弁当箱を抱える。

「よりもよって月乃宮財閥のお嬢様が部下にいるなんて、ずるっこも甚だしい！ そんなの、何だつてできるじゃないか！ あんな大層な罠を作りおつて！ 卑怯だと思わんか！ なあ！」

「そ、そうですよね……」

ハハハハという乾いた笑いと共に、僕は当たり障りの無い相づちを打った。

「……でも、あの人達、どうやってあんな檻作つたんですかね？ とても一人や二人で出来そうなものじゃありませんでしたけど」

「恐らく、こつちの世界の廊下の天井に作らせたんだろ。そしてそれをそのまま都度中の能力で反位相の世界へ飛ばす。向こうとこつちには、同じ座標軸に同じ造詣があるわけだからな。結果、そのままあつちの世界にトラップを設置することができるわけだ」

「……なるほど」

僕はハンバーグを飲み込みながら首肯した。

つくみ先輩は自分の弁当にハアとため息を吹きかけ、

「まったく、風紀委員がいよいよ本腰を入れてきたということは、競争はさらに激化すること必死だな。向こうの世界があんなトラッ

ブまみれになれば、恐らく他の奴らも綿密な作戦を立ててくるに違いない」

「他の奴らって、やっぱり他の生徒もあの世界に入ったりしてるんですか？ つくみ先輩とか風紀委員以外にも？」

「当然だ。一体この学校で何人の生徒が『ワールド・マテリアル』を探していると思ってるんだ。あたしが知っただけでも五、六人はあの世界で探索を行っている。まだ鉢合わせしていないだけで、他にももつといるだろう」

「……………へえ、そうなんですか」

……………うーん、『異世界へワープする能力』って、そんな能力だけで雑誌とかテレビの取材で引っ張りだこになれそうなものなのに……。そういう情報が出回ってないのは、やっぱりみんな、『ワールド・マテリアル』を独り占めするために秘密にしてるってことなんだろうか？

「だから、朝風君、我々の敵は風紀委員だけではないのさ。今我々の周囲にいる彼らも、言うなれば敵なのだよ」

「敵、ですか……………。その人達はみんな、先輩と同じような能力を持つてるってことですよね」

「そういうことだ」

「ご飯の最後の一切れを口に運びながら、つくみ先輩はこくりと大きく頷いた。

「……………しかし『つくみ先輩と同じような』という表現は正鵠さを欠くな。別にあたしがオリジナルというわけでもないし、あたしの能力がスタンダードという確証もない」

「そうなんですか？」

「そうさ。そもそも、うちのクラスメイトの変な男が学校の周りで

木刀を振り回していたら異世界にたどり着いたという噂を聞いたものだから、あたしもそれを真似して家から日本刀や槍、弓、鎖鎌を持ち出して夜な夜な校庭で振り回したところ、あの小太刀で 反位相の世界 への扉が開けたというだけなのだ。だから、あたしの能力もただの踏襲に過ぎんだよ」

「……そ、そうなんですか」

「……家から凶器を持ち出して学校で振り回すなんて、単なる奇行じゃないか。誰かに見つかったら即通報だろうに。よく捕まらなかったな、この人……」

「……ん？ ちょっと待ってください？ えーと、今更な質問ですけど、その、何で先輩は、あそこが 反位相の世界 だってわかったんですか？」

「『何でわかったか』、とは？」

「ええっと、だって、あの世界、ここと見た目はまったく同じだったじゃないですか。位相とかそういうものじゃなくて、もっと他にも説明の仕方もありそうなものですけど。それなのに、何で先輩はあの世界を 反位相の世界 だって断定したんですか？ 僕には何らわからないんですが……」

「ほう？ ……ふふふ。うんうん、なかなかいい質問だ」

先輩は急に、何やら嬉しそうな顔になった。

「そうだ。確かにあたしは、あそこが 反位相の世界 であるという前提で話していた。しかしその根拠は何も示していなかったな。疑惑を持つのは当然のことだ。……そして、いい着眼点だ」

「……いい着眼点？」

「うむ、そうだ。つまり、あたしとしては明確な回答ができない質問になってしまふということだ。……もし、あたしができる限り誠

実に答えようとするなら、『何となく』『感覚的に』という言葉を選ばざるを得ないというのが、正直なところだよ」

先輩は首を数度傾け、自嘲気味に笑った。

「この 反位相 という概念は、あたしの発案でもないし、別に証拠があるものでもない。そもそも、オカルト雑誌に載っていた『ワールド・マテリアル』の何個もの説の中の、マイナーな一派にすぎないのだから」

オカルト雑誌に載っていた説                   そうか、まあ、『ワールド・マテリアル』絡みなら、確かに出展はそうなるのが普通だろう。

世界の創始を解き明かす鍵だと目されている物質                   『ワールド・マテリアル』

数年前、名も知られていないヨーロッパのオカルト学者が、アンダーグラウンドな雑誌で提唱した超自然的物質。その根拠も理屈も説明内容も他の超常現象同様に眉唾物以外の何ものでもなかったが、その独自性がコアな人達に少しかりウケたのだそうだ。そして雑誌への掲載回数と共に証言の種類も増えていき、注目度も掲載されるページ数もじわじわと増加していったのである。

さらには、どこだかの国が国の勢力を上げてその調査を開始したという噂まで流れ、その認知度は加速的に大きくなった。

超自然現象研究者、UFO研究者、霊能力者、哲学者、SF作家、様々な人々がそれに着目し、議論し、色々な仮説を当てはめてきた。そして世界各地にこの『ワールド・マテリアル』の存在するスポットやいわく、象徴するもの、その特性が挙げられていったのである。その流れの中で、この天神岬高校もそのマテリアルスポットの一つとして挙げられたのだ。

「この高校にあると目されている『ワールド・マテリアル』、それはパラレルワールドを解き明かす鍵となる『パラレルスイッチ』であるという意見が大衆化してる。その世界の仕組みとして、無限の選択肢の存在や神の存在、あるいは先刻言った『反物質』を基にした考察、次元数の違いなど、いくつもの説が流れた。その中から、あたしが『何となく』『感覚的に』じっくりきたのが、この 反位相の世界 説だったわけだ」

「……それだけで、先輩はそう決め付けちゃってるんですか？ それはちよつと危険なんじゃ……」

「ふふ。『危険』ねえ では聞くが、朝風君、君はどのようにしてこの世界の仕組みを理解しているのだね？」

……世界の、理解？ 質問がいまいちよくわかりませんが……。

「例えば、この世界でニュートン力学が物理学の常識として扱われているのは、君も知るところだろう？ ニュートン氏が、木から落ちるリンゴを見て発見したというあれだ。物体に力を加えると加速されるといっただけのものだが。……しかし、朝風君、考えてみたまえ。どうして、そのニュートン力学が正しいとわかるんだい？」「どうしてって、そりゃあ、学校で習ってるし……」

「ふん、教科書の内容が覆された例などいくらでもあるさ」「で、でも、偉い学者さんもみんな使ってるじゃないですか。その理論が考え出されてから、誰もそれを否定してないってことでしょう？ それがいっつもじっくりいってることでしょう？ なら、それが正しいってことじゃないんですか？」

「ふふ。『否定できないから正しい』というのは、乱暴な意見だな」

先輩は心持ちおかしそうに笑った。

「『否定できない』というのは、確かに、その箇所に否定するものが存在しないという可能性もある。しかし、『我々に否定するスキルが足りていない』という可能性もまだ存在するのだよ。ふふ。君の言う通り、ニュートン力学は、この数十年、マクロ的力学の上では否定されていないが　しかし、考えてみたまえ。物が動く理論など、いくらでも思いつくだろう？　例えば、この世には我々人間がまったく知覚できない紐があつて、実はこの世の全ての物質はその紐によつて操り人形のごとく操られている、という考えをどうして否定できるんだ？　つまり、我々が『法則』と呼んでいるすべての理論はすべて見えざるものの意思によつてそう見せられているだけで、そんな『法則』はこの世には存在しない。そういう可能性を、どうして君は無視できるんだい？」

「……え？　え、と、そ、それは……」

僕は言葉に詰まつてしまふ。

「ふふ。そうだ。この世の原理、法則のほとんどは、つきつめていけば『自明』という前提から成り立っている。しかし、この『自明』ほど曖昧なものもないのだよ。この世に無限にある『例外』の可能性をすべて排除しなければならぬが、無限のものを排除するなんて不可能だ。今現在我々が認識しているこの世界の構造も、それが一番収まりが言いというだけの話で、それが真実とは限らない」

「……そ、そういうもんなんですか？」

「そうだ。例えば、地球が回っているということは現代では常識になつてはいるが、この世のすべての宇宙学者、宇宙飛行士がすべて嘘つきであるとか、彼らの言語を我々がいつまでもどこまでも誤解し続けているという可能性だつて、ゼロとはいいきれないだろう？　例えば何兆分の一の確率だつたとしても、ゼロではないだろう？　そうなれば、地動説は嘘であり、我々が現在知覚している世界は虚構であるということになる」

……うゝむ、まあ、それはそうですが。

「つまりはそういうことだ。あたしがあの世界を 反位相の世界であるとは知覚している根拠は存在しないが、どんな現象を見せられたところで、あそこが 反位相の世界 だと証明することは不可能なのだ」

ここまで言い終え、反論できない僕に満足したようにニヤリと笑うつくみ先輩。食べ終わった弁当箱の蓋を閉じ、それを包んでいるナプキンをきゅっと縛った。



## 第二話『Enemy』 その二

「つまるところ、もう一人ぐらい仲間が欲しいものだ」

つくみ先輩は席でふんぞり返り（本人のイスではないのに我が物顔である）、爪楊枝で前歯をシーシーほじくりながらそう言った。

食後の爪楊枝を当たり前のように常備常用してる女子高生なんてのは、一体全国に何人いるものなんだろうか　　という疑問が僕の中にもたげてきたが、本格的に悩み始める前に目の前の先輩が言葉を続けて、

「……いや、とは言っても、朝風君、勘違いするなよ？　別に誰でもいいというわけではないぞ。ちゃんと有益な人選をせねばならん。無駄なチームの肥大化は害にしかならんしな」

「はあ……」

眉上で切りそろえられた前髪をさらりと撫でる先輩に、僕は気のない相槌を返した。

仲間、と急に言われても、なあ……。『有益』云々以前に、まずその前提条件からして厳し過ぎるだろう。そもそも『ワールド・マテリアル』探しをしたいと思いますと思っている人がこれ以上他にいるかどうかかわからないし、この加賀野つくみ先輩にきちんと追従することができる人がいるかどうかも問題だし、しかもその人が『ワールド・マテリアル』探しに対して有用なスキルを持つてるかどうかなんて甚だ疑問である。この学校の生徒五百人のうち、一体何人がこれに当てはまるって　　って、あれ？　……そっぴや僕、どれにも当てはまってないか？　………何で僕はチームに入ってるんだらう？

何やら根本的かつ核心的な疑問にぶちあたってしまった、僕は腕を組み小首を傾げ始めたのだが、つくみ先輩はそんなこと気に留める様子もなく、

「しかし何より大事なものは、やはり協調性ということになるんだろうな。協調性。それがなくてはチームがチームでなくなってしまうし」

「……いやいや、先輩が言わないでくださいよ。そこまで先輩に似合わない三文字熟語も珍しいくらい」

バサツ、バサバサバサバサツ

僕の言葉の途中、ふいに本が床に落ちたような音が聞こえた。

首を回し振り返ると、僕の後方に女子生徒が一人。床に膝をつき、落としてしまった教科書をわたたと拾っているところだった。

つくみ先輩よりいくらか長めのボブカット、その割に目がほとんど隠れそうなくらい長い前髪。少し痩せ過ぎ気味のほっそりした輪郭及び体型のクラスメイト。僕の斜め後ろの席の鳴海なるみさんだった。

音に反応して振り返ってきた僕ら二人に気づき、鳴海さんも顔を上げ、こちらを振り返ってきた。そして驚いた。というか、何だか怯えたような顔で僕らを見返してくる。床上の本を拾い上げようとする姿勢のまま、口を半開きにし、華奢な両肩をふるふると震わせている。なんか、まるでライオンが寝ている隙に檻に入つて餌をやるうとしたら不注意で起こしてしまい、壁際に追い込まれ、絶体絶命のピンチに陥った飼育委員のような、そんな様相だった。……そうか、もしかしてこの一帯は、離れ小島なんかではなく、単なる猛獣の檻だったのかもしれない。つくみ先輩が肉食獣だという見解には異を唱えられる気がしなかった。

「……………」

「……………」  
「……………」

三人が三人とも視線をぶつけあい、無言になり、何だか気味悪い時間と空気が出来上がってしまった。しかし程なくして、急につくみ先輩が口元と目元を歪め、まるで野ネズミを捕まえた鷹のような顔になって、

「……………ほうほう、ふふふ、いやいや、君い、なかなか見どころがありそうじゃないか」

と、不気味な声で鳴海さんに話しかけた。

鳴海さんはびくつと肩を震わせたが、つくみ先輩はなおもずいと前のめりになって、

「いやいやいや、あたしはこれでも観察眼には確固たる自信があつてだな。その人物を見ただけでその人がどれだけ優れているか、すばらしいか、そしてあたしのためにどれだけ有益かということが一目で、一瞬でわかるものなのだ。そしてそして、喜ぶがいい。君はあたしのこの観察眼でもって、一目瞭然に判決が下った。『合格』だ。さあ、折角のおめでたい機会だ。早速こっちに来て、少しばかりあたしと、今後の身の振り方について話し合おうでは」  
「……………っ！」

ぴゅー、というSEが聞こえてきそうなほど一目散に、鳴海さんはたったか逃げ出した。拾い上げた本を胸に抱え、机の脚につまづきながら、人にぶつかりながら、全速力で廊下へと飛び出していく。まるでライオンに追いかける小鹿のような逃げっぷりだった。その逃走をつくみ先輩はぼかんと見届け、首をこくりと傾げて、

「……ふむ？　なんだ、急用でも思い出したのか？」  
「……いやまあ、あの娘は無理ですよ」

僕は嘆息しながら答える。

あの人、鳴海唯香ゆいかさんは極度の人見知りで、無口な人なのである  
今僕が言った『無口』と言うのは、単純に『口数が少ない』  
ということではない。そんなレベルではなく、彼女は文字通り字面  
通りに『口数が無い』、まったくもって一度も一遍も一言も口をき  
かない人なのだ。そんなんで社会で生きていけるのかと疑問に思う  
ほどのレベルなのである。

あの方は授業中に指されても、何も答えない。何も言わない。出  
欠を取る時も声を出さず手を挙げるだけだし、合唱の時も歌った試  
しがない。少なくともこのクラスになってからの二カ月は、音声を  
使ったのコミュニケーションというものをとったことがない。当然  
の如く、僕だって彼女の声は一度も一遍も一言も聞いたことがなか  
った。去年の初めの頃はそれで色々問題になったそうだが、今では  
先生たちにも黙認されるまでになっているのである。

「　　鳴海さんは、先輩とは性質も性格も対極みたいな人ですから、  
仲間になってくれるなんて期待薄ですよ」

「ふうむ、そうか、折角の逸材なのに……」

つくみ先輩は残念そうに肩を落とした。

……それにあの鳴海さんは、風紀委員に籍があるという話も聞いた  
ことがある。彼女が一体どんな経緯で風紀委員に入ったのか皆目  
見当もつかないし、彼女が実際に校内の風紀を取り締まってるこ  
ろなんて見たことはないし、彼女が都度中先輩の下でどんな仕事を  
しているのか想像もできないけれど、少なくとも立場的には僕達の  
敵側なのだ。余計に入ってくれるはずもない。

つくみ先輩は背もたれをぎしりと言わせ、

「今のうちに、さつさと盤石を築かねばならんというのに。ここでもたもたしておいたら、他のチームにどんどんアドバンテージを取られてしまうこと必至だ。早急に、彼女に代わる有能人員を探し出さねば」

「……だからって、そんな焦んなくても」

「いいや、それは甘い！ 甘すぎだ！ 特に、あの変な男なぞに先を越されようものなら、今後百年、あたしのプライドは地中に埋まっつて掘り返せなくなってしまう。それだけは絶対に避けなくては」

「誰が『変な男』だと？」

突然頭上から、やたらに通りのいい男の声が聞こえた。

驚いて振り返ると、いつの間にか僕の背後数十センチの所に、すらりと一人の男子生徒が立っていた。

この人はいぶかしんだ顔でちらりと廊下の方に視線を送りながら、  
「……今慌てて逃げていく女の子とすれ違ったが、加賀野、お前が何かしたのか？ まるで肉食獣に追いかけられる小鹿のようだったか。……ふん、まったくお前は、相変わらず人に迷惑ばかりかけているようだな」

そう言いながらつかつかと近づいてくる男子生徒。やたらに背が高い。そして声もなかなか高い。髪はその辺の女子よりもだいぶ長く伸ばしており、艶があり、首の後ろで縛っている。鼻は高く、さながらキジのような顔立ちだった。

誰、この人？  
という極めて当然の疑問を浮かべている僕の向かい、その男を視界に入れたつくみ先輩は、

「ああ、なんだ、お前か　　変な禅十郎」

「『へ・ん・な』じゃない！　へ・ん・の！　　へんのぜんじゅうろう 辺乃禅十郎』だ！  
何回言ったら覚えるんだ、貴様はあつ！」

顔を真つ赤にしてダンダンと床を踏みつける変な先輩　　も  
とい、辺乃先輩。八回地面を蹴ったところでようやく落ち着き、ま  
だ息が荒いままつくみ先輩をきつと睨みつけて、

「……ふん、というか、さっきの女の子。あの形相からして、彼女  
がたまたまお前の視界に入ってしまったところを急にお前が話しか  
け、野ネズミを捕まえた驚みたいな顔で無理矢理勧誘して逃げられ  
たんだらう？　　違うか？」

……当たり前だ。まるで見てきたかのように……。もしかして、つ  
くみ先輩、常習犯なのだろうか？

「……まったく、加賀野、貴様は俺と違って人望がこれでもかとい  
うほどないんだから。貴様が勧誘なんかするもんじゃあない」  
「な、何を、偉そうに！　何が『俺と違って』だ！　貴様の方が人  
望ないじゃないか！」

今度はつくみ先輩が渋面を作ってまくし立てた。

「お前なんか、友達誰もいない癖に！　一人もいない癖に！　覚え  
てるぞ！　去年の体育祭、貴様、一人で二人三脚に出てたじゃない  
か！」

……それはもう『二人』でもなけりゃ『三脚』でもない。ただの  
二足歩行だ。

「そ、そそそ、そんなことはない！ そんなことはないぞ！ あ、あれはたまたまだ！ たまたまにすぎない！」

うるたえたような顔になった辺乃先輩が怒鳴り返す。

「現に、俺には部下が一人いるんだからな！ 俺にはちゃんと理解者がいる！ ふん！ 対してお前はどうかんだ！ だーれもないだろう！ お前につき従ったところで人生を損するだけなのは一目瞭然だ。まったく、人の迷惑を考えろ」

「め、迷惑なんてことはない！ まこと有益で尊い時間の使い方を提供しているんだ！ あたしは！」

「なーにが『尊い』だ。貴様の命令に従ったところで、得るものも得られず、失うものは失いまくり、結局徒労が積み上がるだけだ。

三年前の、まだ貴様がおとなしかった頃ならまだしも、今のお前が誰かとするむ様子なんて、一ピクセルすら想像できやしない

というか、おい」

辺乃先輩は眉をぴくりとひそめ、つくみ先輩の真向かいに座っている僕に視線を合わせてきた。……いつだかと同じパターンだ。

辺乃先輩は横目でじろりと僕を睨みながら、

「……おい、加賀野。なんだ、お前の正面に座ってる、この気弱そうな後輩は」

「……………ふむん？ 彼か？ お前、彼のことを知りたいのか？」

加賀野先輩は口元をにやつかせ、勝ち誇ったような表情になった。

「ふふふふふ。そうさ、そうとも、そうともさ！ 彼こそがあたしのアシスタント！ 太陽系が消滅するまであたしの下僕として働く男！ 朝風君だ！」

「え？ え？ ……ええええええっ！」

辺乃先輩は後ずさり、稲光のバツクでも見えてきそうなほど壮大な驚愕の表情をした。

「げば、したば、え、ええ？ ば、ばかな！ そんなばかな！ 貴様に部下など！ いるはずがない！ できるはずがない！ 嘘だ！ 嘘に決まってる！ 何だ、こいつは！ 精巧なマネキンか何か？」

机に両手をバンツと叩きつけ、僕をじろじろ見てくる辺乃先輩。頬を触ったり髪を撫でたり腕の肉をつまんだりして僕の分子構造を一通り確認した後、

「……うつつうつぬ、ど、どうやら本物の人間のようだ。……お、おのれ！ 加賀野！ 俺の勧誘を断った癖に！ 断った癖に！ まさかこんな枯れたヒマワリみたいな男を仲間に取り込むとは！ ぐぬぬ、何たる屈辱！」

……何だ、あれだけボロクソに言ってる、結局この人もつくみ先輩を勧誘してたのか。都度中先輩の場合といい、つくみ先輩、割とモテてるんだらうか？

辺乃先輩はびしっとつくみ先輩を指さし、

「ええい！ 堪忍袋の緒が切れた！ 加賀野！ さっさと決着をつけてやる！」

「ふん、望むところだ、変な禅十郎」

「へ・ん・の、だ！ ……くうそおう、この！ 加賀野！ 見てるお 来週の体育祭で目にももの見せてやる！」



## 第二話『Enemy』 その三

体育祭当日。

一応いつも通りに登校し、教室にて担任教師によるホームルームを遂行、その後十分ほど着替えの時間が設けられ、体操着に着替えたクラス一同が更衣室から再度教室に参集、しばらく待機時間があつた後、黒板の上に付いたスピーカーから「全校生徒、校庭に集合してください」というアナウンスが流れ、我がクラスの学級委員、しまぐき島吹君が待つてましたと言わんばかりに、

「じゃあ、今日一日がんばりましょう！」

と爽やかな笑顔と共に優等生チックなことを言つて、先陣を切ろうと教室前方にある扉の取っ手に手を掛けた、その時だった。

がらがらと扉が勝手に開き、手を空振つた島吹君はがくりと転倒。その奥からにゅつとショートヘアの頭がのぞいてきて

「さあつ！ 行くぞ、朝風君！ いざ、決戦の時だつ！」

と叫ぶ、体操服に身を包んだ美人さんの先輩女子。いわずもがな加賀野つくみ先輩。

一瞬で、モーゼでも思わせるように僕とつくみ先輩の間の直線が綺麗さつぱりと無人になり、つくみ先輩は難なく僕を発見。次いで、にっこりと満面の笑み。

この先輩は放送直後一体どんな勢いで自分の教室を飛び出してここまで来たんだろう という疑問を口に出すタイミングを完全に失つた僕は、そのまま先輩にずるずる引きずられながら校庭に誘われた。

校庭には、僕らが一番乗りだった。

十五分ほどして校庭に全校生徒が整列し、校長によるクドクドとしたクドい訓示の後、体育委員長による宣誓が行われ、スタート種目である球転がしから体育祭が始まった。

僕は額の汗をぬぐいながら、その観戦を始める。

この体育祭の時間中、出場者以外はグラウンドの外側に並べられた椅子に座って待つことになっており、その席はクラスごとにセクションわけされてずらっと並べられている。クラスの中で中くらいの背である僕は、二年三組のちょうど真ん中あたりが定位置であり、予行の際もその辺りに椅子を置くよう言われていたはずなのだが

しかし僕は、そのエリアの一番後ろにちょこんと座っていた。そして隣にはつくみ先輩。

通常、体育祭と言うのはクラス対抗で争うものであり、それに伴ってクラスの団結力を高める意味合いも強い学校行事である。仲のいい友達とより濃密な思い出を共有したり、あるいは今まであまり話さなかったクラスメイトと仲良くなってみたり。それがこの催しの意義であり、醍醐味であり、正直僕もそんな青春の一日を期待して今日を迎えていた。

しかしこの先輩には、団結もへつたくれもなかったらしい。

先日は、協調性云々と偉そうなことを言ってた癖に。

自分のクラスのエリアには見向きもせず、自分のクラスメイトと会話することもなく、つくみ先輩は完全場違いなこの二年生のエリアに居座り、悠然と構えているのである。この人、クラスに友達一人もいないのかと心配になりそうなほどの確固たる威厳を漂わせている。

時折、僕のクラスメイトがちらりとこちらを振り返ってきて、戦々恐々としたような、あるいはいぶかしんだような視線を投げかけてくる。その視線がちくちくと痛くて、僕としては自クラスであるはずなのに何だかアウェイに感じてしまうほど居心地が悪かった。

……しかしまあ、この一週間、毎日のようにつくみ先輩はうちのクラスまで昼食を食べに来ており、こういう状況もいつも通りと言え

ばいつも通り。そういう視線にも何だか慣れてきた気がする。……  
いや、麻痺してきてる、と言う方が正確か。

「で、君は今日、何の種目に出るんだ？」

球転がしが中盤に差し掛かってきたところで、まるで大会社の社長のようにどつかりと椅子に腰を下ろしたつくみ先輩が、無然と僕に尋ねてきた。

僕は今日のプログラム表を見ながら、

「え？ ええと、僕は玉入れと、百メートル走、リレーの第二走者  
それと 騎馬戦です」

「騎馬戦？ ほほうっ！」

つくみ先輩は何だか嬉しそうな声を上げた。僕の発言がこの人を喜ばせたようだったが、なぜかいい予感はまったくしなかった。

先輩はぼんぼんと僕の肩を叩き、

「何だ、朝風君。あたしは今まで散々君のことを無能呼ばわりしてきたが、なかなかどうして、君もやるじゃないか。まさか騎馬戦にエントリーしてるとは。うん。まったくもって素晴らしい」

「……何が素晴らしいんですか？」

「ふふん、当然、あたしも出場しているから。そして 『あいつ』も出るからだよ」

「……『あいつ？』」

僕は首を傾げ、

「……って、誰ですか？」

「おいおいおい、あたしはあいつの名前を口にするのすら煩わしい

ほど、あいつが鬱陶しくて仕方ないんだ。あいつの名前を呼ぶくらいなら、まだブラジルに玄米茶を買いにパシラされる方がマシなくらいだ。そんな低レベルな質問はしてくれるな」

……ブラジルに玄米茶は売ってるんですかね。

「つまり、あいつとの決着はそこで付けようということだ。もし君がエントリーしてなかったら、最悪女装して、うちのクラスの病欠の女の子の代わりに出さなければならぬところだったんだが。ふん、杞憂だったな」

うんうんと納得顔のつくみ先輩。

僕は心の中で、先月の学級会で騎馬戦に立候補した自分に人生最大のスタンディングオベーションを送りながら、

「……そこで決着をつけて、どうするんです？　そこで勝つと何がどうなるんですか？」

「ふふ。良い質問だ」

つくみ先輩は得意顔。

「先週、あいつとあたしとで協議したんだが、この騎馬戦の敗者にはペナルティを一つ科せられることになった。有体に言えば罰ゲームみたいなものだ」

「……ええと、それはどんな？」

「それはつまりだな」

『自分の部下を相手に譲渡する』ということだ！

つくみ先輩は腕を組み、こくりと首肯した。

ええつと……………ジヨウト？ ……ブカ？  
僕は右手を上げて、

「……………すみません、そのジヨウトって、どのジヨウトですか？」  
「『譲り渡す』の譲渡だ」  
「……………どんな字ですか？」  
「これだ」

つくみ先輩は足元の地面に指で『譲渡』と書いてくれた。なかなか達筆だった。

僕はそれを見降ろし、一つ頷いて、

「ふうむ、そのジヨウトですか。なるほど、なるほど……………。じゃあ、つくみ先輩、もし今回の勝負で我々が勝った場合、何がどうなるんですかね？」

「あいつの部下 確か、上弦じょうげんとかいう子だったか が、我々のチームに加わることになる」

「ほう、なるほど、なるほど……………じゃあ、もし我々が負けた場合は？」

「ふん、そんな未来が起こりうる可能性は考えるだけ時間の無駄なくらい小さいがな。しかし一応建前としては、君があいつの部下になることになる」

「……………なるほど、さいですか」

僕は至って落ち着いた声で言いながら、再度頷いた。そして、

「あの、つくみ先輩？」

「何だ？」

「短い間でしたが、今までお世話になりま ……」

「ごちんっ」

僕の後頭部に拳が勢いよく振り下ろされた。

「何をわけのわからないことを言っている！　これから決戦だといふのに！　戦う前からそんな弱気になつてどうするんだ！」

「いやいやいや！　わけがわからないのはこつちですよ！　何を勝手に僕の進退を決めてるんですか！　僕の合意なしに！」

「いや、合意ならちゃんとしているぞ？　ほれ、誓約書に二人とも署名して捺印もしたからな。もはや覆らんのさ」

「見る」と言いつつ、先輩が紙切れを一枚差ししてきた。見るとそこにはプリンターで書かれた文字で『今日の体育祭で執り行われる騎馬戦において、敗者チームは勝者チームに一名人員を譲渡することに合意いたします』と書かれており、おまけに「加賀野」と「辺乃」の捺印まで押してあった。

その文面を最後まで読み終わり、

「……いやいやいやいや、これ、完全に僕だけが大変じゃないですか！　僕へのペナルティじゃないですか！」

「何を言う。あたしだって辛いんだぞ？　折角見つけた部下を取られるなんて。また最初から探していかなければならん」

「いやいやいやいやいや！　僕は負けたら、よく知らない男にこき使われなければならないんですよ！」

「ふん。それが嫌なら勝てばいいのさ。あの変な男に」

「誰が変な男だ！」

急に、僕とつくみ先輩の背後から声がした。

僕とつくみ先輩が同時に振りかえると、そこに男が一人。見覚えのある、長髪を後ろで一本縛りをした長身の生徒。その風体を目に

映し、僕と先輩は声をそろえて、

「おお、変な男」

「あ、変な先輩」

「だから違うと言っとうろつが！」

悔しがるように地面をだんだんと踏みつけながら憤る変な

辺乃先輩。

「お前ら、わざとだろ！ 絶対わざとだろ！」

「まあまあ、小さな事を気にするな、辺乃」

「おま、否定しないんだなっ！」

顔を真っ赤にして、つくみ先輩の襟首に掴みかかる辺乃先輩。

つくみ先輩は「どうどうどう」と手を振りながら、引きつった笑みを浮かべ、

「というか、どうした、貴様？ こんなところへ？」

「……ふん、最終確認に来ただけだ」

辺乃先輩はつくみ先輩の襟から手を離し、むすつとした表情で答える。

「我々の決着は本日の最終種目、騎馬戦で決めること。そしてペナルティとして、負けた方は勝った方に部下を一名派遣させなければならぬ。いいな？」

「いやまあ、それはいいんだが……」

僕は「よくねえよ！」と抗議しようとしたが、つくみ先輩の右手によって制された。次いで先輩はきょろきょろと周囲を伺うように

首を回し、

「しかし、肝心の貴様の部下が見当たらないぞ？ ……まさか貴様、負けた揚句に『俺に部下なぞいないから、ペナルティは無効だ！』などと言い張るつもりじゃないだろうな？」

「はん。俺はそんなちっちゃい人間じゃない。ちゃんと部下はいる。連れてきた。ほれ、彼女がそうだ」

そう言いながら、辺乃先輩はすつと横に移動した。

その後ろに、一人の女の子が現れる。

背は女の子にしても低めだが、何だか姿勢がどっしりしている。髪型は、首下まで伸びたロングを耳の後ろで二つ割り。目が大きめで、視線も真っ直ぐ。その表情といい、目つきといい、立ち姿といい、どこまでも我を通しそうな印象を受ける女子だった。

辺乃先輩はこの女の子の前に掌を差し出し、

「彼女こそ、俺の親愛なる部下、上弦しづ君だ」

「……どうも、初めまして」

目つきは相変わらずきついまま、しかし一応の礼儀と言う感じで、ぺこりとお辞儀してくる上弦さん。探るような目つきで僕らを見上げてきて、

「ふうん、この方が、リーダーの仇敵ですか。ふうん……」

「ふむ、上弦さんとな？ そのリボンの色からして、君は一年生か」

つくみ先輩は指を当て、品定めするかのようにな上弦さんの頭から足先まで視線を滑らせた。

「ふうむ、さすが辺乃の部下だけあって年の割にぶてぶてしいが…



…。まあ、君はもはやあたしの部下になったも同然だからな。今の瞬間からは、あたしのことをリーダーと呼ぶよう  
「まだ早いだろ！」

再びダンダンと地面を踏みつける辺乃先輩。次いで、ぴしっつとくみ先輩に人差し指を向けて、

「ふん！ 俺が勝ってもそのひよろひよろ男しか手に入らんとするのはいかにも不公平だが、お前の戦力を削げるといふならそれはそれでよしだ！ 首を洗って待っている、加賀野！」

捨て台詞のように言うと、辺乃先輩はくるりと後ろを向き、まるで地平線に威張り散らしているかのようにずんずんと向こうに歩いて行った。

その後ろ、上弦さんもとことと付いていく。

僕は、後に取り残されたつくみ先輩の横に突っ立ち、

「……先輩、なんともまあ、モテモテなんですなあ」  
「ふふふん。まあまあ、そう妬くな、朝風君」

僕の発言が厭味だったことにはついと気付かず、つくみ先輩は得意げに答えた。

「とにかく、あいつはあれでもそこそこ優秀な男だ。相手にとって不足はないだろう。正々堂々、返り討ちにしてやるのだ！」

右の拳を振り上げ、なかなかの音量でそう言いきるつくみ先輩。

僕はここでようやく、周囲のクラスメイトから疎ましがらうような憐れむような視線をさっきからずっと一身に浴びていることに気付いた。……………やはり、麻痺してきているらしい。

## 第二話『Enemy』 その四

その後、体育祭のプログラムも次々と行われ、徒競争、ムカデ競走、玉入れ、借り物競走と各種目が一つずつ消化されていった。

昨年の状況を顧みる限り、この体育祭自体は元々そこまで盛り上がるようなイベントという印象もなかったのだが、それでも今年はいくらか熱戦も繰り広げられていた。特に一位と二位のクラスが一騎打ちをするような種目では、応援合戦が自然発生していったくらいだった。その応援合戦が白熱しすぎて、場外乱闘まで勃発しそうだったという話まで後から小耳にはさんだ。

しかしながら、どこぞの先輩に自クラスから無理矢理引つ張り出されてもはやその様子を客観的にしか見ることができなかった僕は、「うんうん、これが青春だよなあ」なんていう、まこと他人事な感想を抱く他なかった。何だか人生の大事な部分を損している気がひしひしとする。

腕時計を見ると、現在時刻は午後二時半。

一日の競技もすでに七割方終わったが、一応今の所、大した混乱もなく催しは進行していつている。

まあ、棒倒しの最中つくみ先輩と辺乃先輩が突然その場から消えたり（後で聞いた話だと、二人とも 反位相の世界 に場所を移し、そこで棒もいよいよまま命がけの戦いを繰り広げていたらしい。終了後、二人のジャージがやたら汚れていたのにも納得がいった）、あるいは借り物競走でつくみ先輩が突如、借り物が描かれたメモを地面に叩きつけたり（つくみ先輩が握ったのが辺乃先輩がこっそり混入させておいたダミーで、そこには『ワールド・マテリアル』と書かれていたそうだ。「借りてこれるもんなら、わざわざ時空移動してまで探したりせんわ!」とは、つくみ先輩の言）と、表沙汰にはならない争いはあったことにはあったそうである。しかし、とりあえず他人に迷惑がかかっていないようなので、僕は特に気にしな

いことにした。

そして午後三時十分を回ったところで、いよいよ騎馬戦の参加者がアナウンスで呼び出された。

つくみ先輩はすくつとイスから立ち上がると、

「では、行くぞ！」

と鼻息を荒げながら言って、すたすたと入場口へと歩いていく。僕は慌てて、

「あ、ちょっと、僕はトイレ行ってから行くんで、先に」

「逃げるなよ？」

ぎらんと目を光らせながらつくみ先輩が振り返ってきた。そこにはいつもの柔らかな微笑など微塵もなく、眉間にシワが寄りまくり、口の端から牙のような八重歯が覗いていて、さながら修羅のような表情が張り付いている。……どうやら、試合直前のボクサーの如く、相当に気が立っているらしい。

「も、ももも、もちろんですよ」

とどもりながら言って、僕は逃げるように足早でトイレへと向かった。

「……バツくれたら、あとでどうなるかわかったもんじゃないな」

用を足し終えた後、僕は手を洗いながらそんな独り言を呟いた。グラウンドを見ると、周りの応援の声が大きくなっている。……

まあ、今日のプログラムの中でも、言ってみれば一番派手な種目だ。

周りの期待もひとしおなのだろう。

はあ、と諦めたような溜息をつき、僕はとぼとぼとグラウンドへと足を向けたその時、

「……………あっ」

校舎の壁際、急に目の前に人が飛び出してきた。

僕はびくつきながら急停止。

見ると、それは見覚えのある女子生徒だった。首の中ほどで切りそろえられた後ろ髪と目を覆うほど長い前髪を有したクラスメイト、鳴海さんだ。

驚いたような顔で僕を見上げてくる鳴海さん。

僕も呆然と見つめ返してしまった。

僕がまず驚いたのは、不可抗力とは言え、今初めて鳴海さんの『声』というものを聞いたことだ。コンマ数秒の溜息のような短母音のみだったが、初めてこの人が音を発するのを認識した。この人の声帯が空気を震わせるのを観測した。バラードでも歌えば引き込まれること間違いなしと断言できそうなほど、まるでそよ風のような透明な声だった。

そしてもう一つ、僕が驚いたこと。それは今目の前にいる鳴海さんが 『泣いている』こと。

彼女の目尻に滴が浮かんでいる。あくびや何やらで偶発的に生まれたものとはとても思えない、今にも頬を伝って零れそうなほど大粒の涙だった。僕は半ば啞然と、その瞳を見つめてしまった。

今までこの人が感情を露わにするところも見たことがなかったのに、よりもよって第一近接が涙とは……………。

僕はあからさまに狼狽しながらも、

「え？ え、えと、な、なななな、鳴海、さん？ ど、どどどどうした、の？」

なるたけ声のトーンを落としながら尋ねた。しかし、

「……………っ」

鳴海さんは一瞬戸惑ったような顔になったが、まるで表情を隠すかのようにすぐに顔を俯けた。そしてそのまま僕を避けるように走り去ってしまう。僕はただただ、目をゴシゴシこすりながらグラウンドの方へ駆けていく後姿を見送る。

「グラウンド？ …………… ああ、そうか、風紀委員も委員代表として、騎馬戦に出るんだっけ……………」

僕がとりあえず目先の疑問を一つ解消したところで

「なーにをやっておる！」

「ぐお……………」

いきなりごつんと後頭部を殴られた。

頭をさすりながら振り返ると、先刻と同じ格闘家のような表情をしたつくみ先輩。

「早く行かんと始まるぞ！ さあ！」

ぐいと腕を掴まれ、僕はつくみ先輩に引きずられ、そのままグラウンドへ入場したのだった。

## 第二話『Enemy』 その五

この天神岬高校の体育祭において執り行われる騎馬戦は、一応の所男女混合競技となっている。

しかしもちろん、他競技と比べても一位二位に入るくらいの危険を伴った競技である。女子でこれに好き好んで参加する人など極めてまれだし（クラスから一人、格闘技系の部活をやっている人が出るか出ないかである）、それにマナーとして男子は男子、女子は女子と競い合うという風潮ができていた。

それなのに、である。

つくみ先輩は男女どこるかクラス・学年さえ無視して、颯爽と僕と騎馬を組んだのである。他の二人は、先輩がクラスメイトの中から見つくるつた つまるところ、無理矢理強引に頼まれたら断れないタイプの 女子生徒。畑中はたけなかさんと用賀よつがさんという先輩だった。この二人は何だか諦めたような悟ったような表情で、渋々とつくみ先輩についてきた。

「そしてもちろん、上はあたしだ！」

街頭演説のような声で言っつて、先輩は僕ら三人がよたよたと造った騎馬に颯爽と乗った。一瞬、今までの意趣返しにこのまま落としてやるうかとも思ったりしたが、一応僕もジェントルメンである。数秒にわたる熟考の末（どうせ、また後頭部をぶたれるのが目に見える）、泣く泣くそれを諦めた。

赤と白の両陣営に分かれ、各組二十八の騎馬がラインに並ぶ。そして審判役の体育委員の笛が鳴り響き、怒号と共に全騎馬が一斉にグラウンドの中心に駆けだしていった。

「ほれ、早く行け！」

「いたいっ」

頭頂部をぱちんと叩かれ、僕は鞭打たれた馬の如くグラウンドへ駆けだした。

中では、すでに熱戦が始まっている。

一対一で取っ組みあっている騎馬もいれば、三対一で囲い込んで敵を追い込んでいる騎馬、あるいはそろりと敵の後ろに忍び寄って鉢巻きに掴みかかる騎馬もいる。さながら本物の合戦の如く咆哮が響き、巻き上がった砂ぼこりで視界もおぼつかないほどだった。

グラウンドの中ほどに達したところで、馬上のつくみ先輩はきよるきよると周囲を伺う。そして右斜め三十度の所に、やたらに背の高い長髪・一本縛りの男を発見。

「いたぞ！ 敵はあそこだあ！」

「いたいっ」

再びぺちんと頭を叩かれ、僕は慌ててそちらへと舵を取る。

敵前四メートルの所に達したところで、その敵方 辺乃先輩もこちらを発見したようだった。にやりと不敵な笑みを浮かべながらこちらを睨んできた。

「来たか！」

言いながら右から掴みかかってきた敵を振り払い騎馬を崩すと、それに目を与えることなく、真っ直ぐこちらに向かってくる

ちなみに、彼の部下、上弦さんは、辺乃先輩の右後ろに配し、彼の足をぶるぶると支えていた。見た感じ、支えるだけで目一杯、力一杯という感じだった。どうやらこちらにもイレギュラーな男女混合馬らしい。

つくみ先輩と辺乃先輩。かちりと視線をぶつけあい、一瞬間を置

いた後、

「うおおおおお！」

「とりゃああああ！」

双方、さながら虎の雄たけびのような叫び声と共に、騎馬を走らせ正面からぶつかっていった。それがつまり具体的にどういう状態かと言おうと、

ぼんっ

つくみ騎馬の前衛である僕が、辺乃騎馬の前衛である体格のいい男の先輩の胸元に頭から壮大にぶつかったということだ。……あまりの衝撃に、一瞬目の前が白くなった。

ふらりと倒れそうになったが、肩の上からつくみ先輩の全体重をかけられ、足を動かすことすらままならない。そしてそのまま、僕はこの乱闘の中に巻き込まれ、なされるがままたただモミクチャにされた。

つくみ先輩の蹴りが僕の鳩尾に入ったり、敵方騎馬の前衛の人に足を踏まれたり、辺乃先輩に髪を掴まれたり、上弦さんの頭がごつごつ顎にあたり……。どこかにこの風景を描画した画家がいたとすれば、恐らく何も迷うことなくその絵を『地獄絵図』と題したことだろう。

戦況は刻々と混乱を極め、数秒の後には、僕は自分がどういう状態なのか自分でもわからなくなっていた。おまけに砂ぼこりが舞い上がり、視界すら覚束ない。かろうじて上の方から、

「おのれ、辺乃！ 今日こそ決着をつけてやる」

と、鞘から刃を抜くような音と、

「いいだろう！ 覚悟しろ、加賀野！」



と、木刀をぶんぶん振りまわすような音が聞こえたくらいだった。そして

次に僕が目を開けると、そこはがらんとした校庭だった。

少しばかり息苦しさをを感じる。まるで全身が一瞬にして大量の力ロリーを消費したような虚脱感。僕は地面にへたり込み、エホエホと何度かえづいた。

見ると、目の前の地面に何人が寝転がっている。

……いや、ぐたりとしてぴくりとも動かないところを見ると、気でも失っているのだろうか？ 全部で四人　うちの騎馬を支えていた女子二人と、辺乃先輩の騎馬を支えていた男子二人だ。

えつと……どうということ？

わけのわからない急展開に僕の脳が一瞬フリーズしかかったところで、

「……まったく、リーダーったら、いきなり　こんなところに連れてくるんだから」

そんなぼやき声が近くから聞こえ、僕はびくりと顔を上げた。

ポブカットの女の子　上弦さんが、呆れたような顔で僕の背後を見ている。

「……しかし、あの二人。今日二回目の時空間移動だというのに、何であんな平気そうなんでしょうかね？ 私ですら少し目眩がするというのに。……やはり流石と言っべきか。……もしくは、興奮状態のせいで自身の虚脱感にも無自覚なだけかも」

独り言のように呟きながら、しかし視線は動かさない。



「……………っっ！」

僕はがばりと身を起こした。それと同時に、僕の太ももの上に何かが落ちる。見ると、それは折り畳まれた白いタオルだった。ひんやりと濡れている。

僕の額が湿っぽい。……………このタオル、僕のデコに置いてあったのか？ ええっと、僕は、看病が何かされていたんだろうか？

見れば、僕の下半身には布団がかかっている。まったく見覚えのない、唐草模様の柄だった。僕の尻の下はベッドだった。

えっと、ここは、どこだ？

僕は周りを見渡した。やけに薄暗い部屋だった。四方が戸棚に囲まれた教室だ。

「？ え？ え？」

……………あれ？ お、おかしくないか？ 確か、僕は校庭にいたはずでは……………？ ？ 確か今日は体育祭で、僕は騎馬戦に出て、そこでもみくちやにされて、反位相の世界に連れていかれて、そこで気を失って……………。あれ？ え？ も、もしかして……………

「……………夢？」

「ふふふ。違いますよ」

突然、僕の耳元から声がした。

僕は飛び上がった。体勢を崩しベッドから落ちそうになりつつも、その声の発生源を見る。

それはベッドの上で四つん這いの体勢の女子生徒。僕の肩の後ろから顔を覗かせている。艶やかなロングの黒髪に、慎まじやかなルックスを兼ね備えたお嬢様

「月ノ宮……先輩」

「ふふ。御気分はいかがですか？」

月ノ宮先輩はベッドの上にちょこんと正座すると、さらなる笑顔で聞いてきた。

「かれこれ四時間も眠ったままでしたからねえ。もう今日は目を覚まさないんじゃないかと思いました」

四時間？

窓の外を見ると、完全に真っ暗だった。腕時計を見れば、七時半。……そうだ、確か、あの騎馬戦が始まったのは体育祭の最後、三時半くらいだったっけ。

「……じゃあ、やっぱり、今日が体育祭だったのも夢じゃない」

「はい」

「僕が騎馬戦に出たのも夢じゃない」

「はい」

「そのどさくさで、反位相の世界に連れてかれたのも」

「夢ではありません」

月ノ宮先輩は首を横に傾けながら答えた。

「会場から突然八人が消えたものですから、都度中会長が慌てて皆を連れ戻しに参られたのですよ。向こうの世界まで」

そうか、都度中先輩が僕達を……………今回はかりは風紀委員に感謝だ。

僕は顔を上げ、

「…………あの、つくみ先輩は？」

「ふふ。加賀野さんは、会長が無理矢理家に帰しました。あなたを看病すると言って聞かなかったようですが、それを理由に学校に残られて、またワールド・マテリアル 探しなぞされてはかないませんからね。ですから、代理で私が付き添いをさせていた দিয়েおりました」

「…………はあ、そうだったんですか。それは、その……………ありがとうございませす」

僕がお辞儀をすると、月ノ宮先輩は「いえいえ」と照れたようにお辞儀を返してきた。

「ふふ。正直、こんな薄暗い密室で男性と二人きりというのは少しばかり危険な気もしたのですが」

わずかに戸惑ったような表情で、ぐるりと室内を見回す月ノ宮先輩。

…………いやいや、別に僕は何もしませんし、できないだろうし。…  
…そもそも、お嬢様なら護身術の一つや二つ習ってそうなものだ。  
何のスポーツもしていない僕じゃ、無理やり迫ったところで返り討ちが関の山だろう。

月ノ宮先輩は僕にすつと視線を戻し、

「しかし、今回のことで 我々 は、大変嬉しい情報を手にできました」

「嬉しい、情報？ ……………って、えと、どんな…………？」

「あなたが安全、ということですよ」

薄い笑みで答える月ノ宮先輩。  
僕は首を傾け、

「……………安全？」

「ええ。片道の位相間移動だけで、あなたは気を失っておられましかたらね。これは、あなたがまったくとっていいほど あちらの世界 に行き慣れていないという証拠。確固たる、確かな証拠です。この意識喪失が仮病とは微塵も思えませんでしたからね」

「え？ ……………あ、はあ……………」

……………うーん、そういう信頼のされ方はどうなんだろう？ もしくは、単にナメられているというだけなのだろうか？

果たして「ありがとうございます」と答えるべきなのか「すいません」と答えるべきなのかよくわからず、僕は曖昧な返事と共にぼりぼりと耳の後ろを掻くだけだった。

その様を見てふつと笑う月ノ宮先輩。

と、ここで、先輩はいきなり笑みを消した。

その突然の変化に、僕は思わずたじろいでしまった。びっくりしたというか、怖かったというか。反射的に上半身をのけぞってしまっただが、先輩はさらにずいと僕の方に頭を寄せてきた。そして心持低い声で、

「……………ときにあなたは、あの世界 がどうして ああ なのか、疑問に思ったことはありませんか？」

「…………… ああ ？」

僕は首を捻り、

「と、いうと？」

「私の知る限り、少なくともあなたは二回以上、あちらの世界に行っておりませよ？実際に行ってみて、あなた自身、何か、どこかに違和感を感じませんでしたか？」

「違和感、ですか？……い、いや、さっぱり」

僕は首を水平に振りながら答える 正直なところ、二回と

もそんな余裕がなかったというのが本音だ。どちらも僕の気持ちをトーンと考えてくれていない急な移動だったし……。それにわけのわからないことばかりで、理解できてないことだらけで、一体どこの部分を『違和感』と称すればいいのかわかってない感じた。

「……………そうですか」

月ノ宮先輩は笑顔は崩さず、しかし少しばかり落胆したような声で言った。

……………うーん、今の回答、期待外れだったのだろうか？ このお嬢様の期待に応えることができないというのは、何だか男として悔しくなってしまう。

月ノ宮先輩は考え込んでいるように、あるいは落ち込んでいるように、口をつぐみ、顔を伏せてしまった。

この暗い部屋で無言になるという空気に僕はものの三秒で耐えられなくなり、慌てて世間話を継続するかのようになり、

「……………あ、あの、でも、風紀委員でのも、難儀な活動ですねえ？」

「……………え？」

月ノ宮先輩は顔を上げ、きょとんとした目で僕を見てきた。

僕はわたわたと、

「いや、だって、すごく大変そうじゃないですか。ほら、こんな放課の時間まで拘束されるんですから」

「……………ふふ、まあ、そうですね。この活動に参加して以来、私の自由時間もお小遣いも、すべて飛んで行ってしまってます」

柔和に笑って応えてくれる月ノ宮先輩。

……………この人のお小遣いは一体いくらなのだろうと疑問に思いつつ

も、  
「うーん……………そんな大変な仕事なら、あの『G・O・W』に任せる  
つてのはどうなんですか？」

「ええ？……………『G・O・W』に？」

「ええ。……………まあ、僕はよく知らないんですが、その『G・O・W』  
つて、ワールド・マテリアルを守るための組織なんですよ？  
だったら、風紀委員が頑張らなくても、その人達に任せればいい  
んじゃないですか？」

「なるほど、『G・O・W』に任せる。『G・O・W』に……………ふ  
ふ、うふふふ、なかなか斬新なアイデアですが」

月ノ宮先輩は顎に手をやり、

「……………しかし残念ながら、私達風紀委員の……………とりわけ、会長  
のお考えは違います。あの方は、現在の我が校生の……………向こうの世界  
への頻繁な侵入を『大事にしたくない』、『他者に知られたくない』  
という方針なのです。ですから、風紀委員は『G・O・W』が  
本格的に動き出す前に事を納めることを目標としているのですよ」

……………ふつむ、そうなのか。そうだったのか。

「……………えーと、じゃあ、月ノ宮先輩。あなたはどうなんですか？」



こんな活動に時間とお金を投じて、それだけ苦勞して、あなた自身は一体何をどうし

「もう、こんな時間ですね」

月ノ宮先輩は、腕時計を見ながら言った。

つられて僕も壁掛け時計を見ると、すでに八時少し前になっていた。……いつの間にか、二十分も話し込んでいたのか。

「さすがにこれ以上遅くなると朝風さんのご両親も心配なさるでしょうし、そろそろ帰りましょう。体力も大体回復した頃合だと思いますが………どうですか？ 立てますか？」

そう言いながら、ベッドの横に立った月ノ宮先輩は僕に手を差し出してくれた。

正直体調的にはまったく問題なかったけれど、折角の御好意を断るのもどうかと思い、僕はその手を借りながら立ち上がった。

「本日は長々とお話に付き合っただき、ありがとうございます。ありがとうございました」

僕が「いや、どういたしまして」と答えようとしたところで、ふいに月ノ宮先輩の顔が近づいてきた。びっくりして肩を強張らせていると、そのままほっぺたにキスをされた。

一瞬何が起こったか理解できなかったが、しばらくしてようやく、この人が金持ちのお嬢様であることを思い出した。

ああ、そうか、そうだ、これは、いわゆる欧米風の挨拶。

映画なんかでたまに見る、向こうの人が親しい人に対して行う挨拶だ。今までテレビ画面の中でしか見たことはなかったけど、多分この人は何回も海外に行ってるものだから、向こうの挨拶が板についてるんだろう。こういう文化が日常なんだろう。……軽いカルチ

ヤーショックだ。

しかし確かこういうのって、親しい人とするものだと聞いていたけど……この先輩の中では、僕も「親しい」の分類に入っているのだろうか？ もしくは何かの友好の証？

僕が何も言わず呆けていると、月ノ宮先輩は怪訝な顔で僕を見てきて、

「おや、どうしたんですか？ 顔が赤いですよ？ ……ああ、もしかして今のがファーストキスでしたか？ ふふ、それはそれは、失礼いたしました」

心持おかしそうに笑う月ノ宮先輩。

いやいや、ほっぺたはノーカンだろう……？

「さあ、早く出ましよう。こんな時に限って ワールド・マテリアル 探しをしている誰かを見つけるかもしれない。こんなところを見られたら、噂でも流されたら、加賀野さんに怒られてしまいます。ふふ さあ、玄関までお送りいたしますわ」

## 第二話『Enemy』 その七

校舎の玄関口で、僕は月ノ宮先輩に手を振られながら昇降口を出た。

清楚なお嬢様に笑顔で手を振られるというのは、それだけです。こぶる気分がよくなってしまふものだ。変な優越感が沸いてくる。内心、物凄くこの場所を離れがたかったが、彼女を視界から外してしまうのが至極勿体ない気がしたが、時間が時間だ。さっさと帰らないと夕飯が片付けられてしまふ。このままでは麺しか入ってないインスタントラーメンで空腹を満たす羽目になってしまう。

正直、こんな時間に女の子を一人にする方がよっぽど危険な気もしたけれど、まあ多分、彼女のSPがそこかしこに潜んでいたりするんだろう。校舎の影とか、垣根の奥とか。変に長居すると、僕の方が目をつけられて危ないのかもしれない。

僕はカバンを抱え直しながら、月ノ宮先輩に背を向け、校門に向かってとぼとぼと歩きだした。歩きながら、手持無沙汰なのを紛らわせるように、僕は何てこともない考えを巡らせた。

あの月ノ宮先輩というのは、一体どういう人なのだろう？

どうにも、僕はあの月ノ宮という先輩が掴みきれていないいや、別に今のところ何の問題もなくコミュニケーションは取れている。会話も成り立っている。僕の方としては特に不満はないし、むしろ僕みたいな後輩に優しくしてもらって恐縮してるくらいだけだ……。

最初僕は、お嬢様という性質から来るそのおおらかな価値観と純粹無垢な正義感から、彼女は風紀委員に入ったんだろうと思っていた。あるいは、あの都度中先輩に感化されて、付き従うように風紀委員に入った可能性もあると思っていた。

しかし、話してみてもわかったが、彼女は通り一辺倒な価値観に簡単に衝き動かされるようなタイプではない。そして、彼女の意志は

都度中先輩のそれとは幾らか違うようにも感じた。

彼女には恐らく、彼女固有の何かがある。

建前の『裏側』が。

しかしまあ、これはただの直観だ。何の根拠もない。何の目途も立っていない。

それはつまり、彼女も彼女で自由に活動しているという、それだけのことなんだろう。つくみ先輩が勝手気ままに反位相の世界に入り浸っているように。つくみ先輩を野放しにしているのに、月ノ宮先輩を非難する道理なんてありはしないだろう。

つと、そういえば。

結局、つくみ先輩と辺乃先輩の勝負はどうなったんだろう？ どっちが勝ったんだろうか？ 二人の勝負は最後まで見届けられなかったし、月ノ宮先輩からも結果は聞いていない。

結局僕が売りに出されることになったのか？ それとも上弦さんがウチに来ることになったのか？

……まあ、明日聞けばいいか。どちらにしろ、僕の待遇は大して変わらない気がする。

僕はそんなことをつらつら考えながら校門を出た。そして右に曲がった、その時、

「……………うおっ！」

僕はびくついた。

目の前に人が一人、いたのである。

周りが薄暗く、一瞬その人が誰なのか判断がつかかねたが、しかしすぐにわかった。わからないわけもなかった。この数日、最も僕の视界に入る機会が多かった人。ショートヘアで、垂れ目で、女子の制服を着た先輩

つくみ先輩だった。

「お、驚かさないで下さいよ」

「はっは、出会いはいつも劇的であるべきだろう」

「いや、劇的と言うか、喜劇的と言うか……」

高笑いするつくみ先輩を、僕はねめつける。相変わらず、いつも人の気分を削ぐようなことしかししない人だ、と　　しかし、ここでふと、僕は何となく『違和感』を覚えた。何か……何か、どこかが『違う』ように見えた。『違う』ように思えた。………：………：けれど、何が『違う』のかはよくわからない。どこが『違う』のかは答えられない。言うなれば　　そう、やはり、『違和感』としか表現しようがない、そんな何かだった。

「ん？ どうした？」

しばし黙り込んでしまった僕に、つくみ先輩が尋ねてきた。頬をぺたぺたと触りながら、

「あたしの顔に何かついてるか？」

「え、あ、いや、そういうわけじゃ、ないんですが……」

「ふむ？ ……ふふ、まあ、見慣れたはずのあたしの美貌も、夕闇の中ではまた一段と映えるのだろう。見惚れるのも無理はないな」

先輩は背を逸らし、からから笑った。

「しかし、だいぶ遅かったな」

「へ？ ……え、あ、いやまあ、少しばかり月ノ宮先輩と話しこんじゃいました」

「ほう、月ノ宮、と」

思案気に顎を撫でるつくみ先輩。

「……というか、先輩はここで何してるんです？ 都度中先輩に連れ返されたって聞いたんですが」

「ん？ ああ、一旦帰ってから、もう一度ここに来たんだ。君の具合はどうだろうと思って、ね」

つくみ先輩は何だか照れたように鼻をぽりぽり掻き、

「まあ、元気そうで何よりだ                    じゃあ、あたしはこれで失礼するよ」

「え？ 帰るんですか？ これからまた    ワールド・マテリアル探してもするのかなと……」

「いや、今日はもうお開きにしよう」

そう言って、先輩は踵を返した。そして「じゃあ、また明日」と言って、手を振り振り行ってしまふ。

僕は立ちつくしたまま、先輩を見送った。見送りながら、今の先輩の様子を反芻する。

どこことなく感じた違和感。いつもの先輩と違うところ。先輩の頭の前から足の先まで思い出し、一つ一つ整合して行って、何となく思い至る。そうだ、何だか、いつもに比べてほんの少しだけ

目が、寂しそうだった。

### 第三話『The conflict』 その一

「では、今週の土曜、一時半に駅前集合だ！」

つくみ先輩が僕と上弦さんにこう言ってきたのは、体育祭が終わって三日後の放課後のことだった。

その時の僕はちょうど、いそいそと自教室で帰り支度をしていたところだった。思いのほか本日出された宿題が少なかったので、帰ったら一体何して遊ぼうかとウキウキ心躍らせており、おまけに今週末に楽しみにしていた映画の封切が迫っていたので、有頂天と言っても過言ではないくらいにすこぶるポジティブな気分だったのである。

そこに乱入者、加賀野つくみである。

おまけに、上弦さんまでズルズルと引きずられて来た。首根っこをつくみ先輩にがっしりと捕まれ、さながら親猫に運ばれる子猫のような姿勢だった。

僕は両名を視界に映しつつ、数秒間呆けながらも、

「……え？ ど、土曜、ですか？ いや、あの、ちょっと、僕、よ  
てい」

「折角我々は仲間となったんだしな！ 同じチームとして！ これから共闘していく者として！ 結束を強くしていかなければならない！ お互いがお互いをよく知っていかなければならない！ そのための時間として、今週の土曜の午後を使おうではないか！ なあ  
！」

浮かれすぎてリミッターが外れているのか、胸を張り、突風でも引き起こしそうなほどの大音量を張り上げるつくみ先輩。

僕は右手を拳げ、

「……あの、先輩、だから、僕は、今週は」

「例えばだ！ 我々がピンチに陥ったとして、瞬時の判断が必要な場面に遭遇したとして、そんな時、わざわざ臨時の打ち合わせなど行つてられないだろう？ お互いの呼吸でもつてタイミングを、ペースを、作戦を、判断を合わせていかなければならないだろう！

そのために、彼が、彼女がどういう人間なのか、きちんと知っておく必要があるのだ！ 知らなければならぬのだ！ これは急務なのだ！

いやまあ、なんだ、別に難しく考える必要はない。有体に言えば単純に三人で遊ぼうと、それだけのことだ！ 楽しいオリエンテーションだ！」

「え、だから、ですね、申し訳ないん、ですけど、僕」

「この上弦さんも！もしかしてデートの予定でもあったら申し訳ないと思つてたんだが、運のいいことに！ マコト運のいいことに！ 土曜は空いていたらしい！ 空っぽだったらしい！ だったら、このチャンスに逃すわけにはいかないだろう！ だから急遽、今週の土曜に日取りを決定したわけだ！」

「あの、ですね、僕、チケット、もう買つてて、日にちも」

「ああ、ああ、特に準備物はいらぬ！ そんなシチ面倒くさいことをするつもりはないからな！ ある程度のお金を持ってきてくれればそれでよし！ プランは大体あたしが立てているし！ 心配無用！ 君のすべきことは、時間厳守で駅前に集合すること！ 一時半だぞ？ わかつたか？ わかつたな？ うん、よし、では楽しみにしておけよ！ うわっはははははは……」

それまで掴んでいた上弦さんをぽいと放り投げると、どこぞの悪役のような高笑いと共に、つくみ先輩はさつさと立ち去ってしまった。

上弦さんはむくりと起き上がり、じろりと僕を一瞥。そのままよろよろと二年三組を後にした。



最終的に、土曜の映画のチケットの処遇に困った僕だけがこの部屋に取り残されたのだった。

僕はあまりの事の成り行きに、ぽかんと立ち尽くす。

……な、何だ、何だったんだ、今の先輩のテンションは？ アクシオンは？ ついてけない。ついてけない。ついてく気にもなれない。この前の『寂しそう』なんて雰囲気は微塵もなかった。欠片もなかった。何の見間違えだったんだ？ 何の勘違いだったんだ？ これがいとも通りと言えればいつも通りだけれど……。

と、誰かが僕の方にトコトコ近づいてくる足音が聞こえた。

ぎちぎちと首を回すと、クラスメイトの虹雪にじゆきさんだった。

虹雪さんは恐る恐るという表情で、ヒソヒソ話でもするよう口元に手を当てて、

「……えっと、朝風君、今度は何？」

「……いや、よく、わからない」

僕は素直に率直に答えた。

実際、つくみ先輩がどういう意図でもってこの催しを考え付いたのかよくわかっていないのも事実だし、何か取り繕わなければならぬにしても、何をどう取り繕えばいいのか見当もついていないのだから、やはり「よくわからない」と答える他ないのだ。他に選択肢はない。

「……そ、そう、まあ、気をつけてね」

僕の身を案じてくれてる気持ち二割、周りを巻き込まないでくれという懇願八割くらいの苦笑いと共に、虹雪さんは席へと戻っていた。

その苦笑に苦笑でもって返しながら、僕の中にはやるせない気分だけが沸き起こる。

虹雪さんとの間に　さらに言うなら、クラスメイト全員との間に　宇宙まで届きそうなくらいの巨大な壁がそびえ立っているような感覚だった。つくみ先輩の所業にもだいぶ慣れてきた麻痺してきたといっても、やはり、この喪失感にだけはまだまだ慣れないものだ……。

虹雪さんは、島吹君の相手として今学期の学級委員に選出された、優秀かつ人望も厚い女子である。笑顔も魅力的な人で、男子に気になっている女子のアンケートをとれば間違いなく過半数は取ると断言できる。かく言う僕も支持者の一人だ。もし彼女と付き合ってもしたら、夜道は怖くて一人では歩けなくなるだろうというくらいの人気を博している女の子である。

年度当初は、僕自身、彼女との会話に一喜一憂していたものだが……いや、つい数週間前まではそんな感じだったはずだが

いつの間にか、そんな余裕もなくなっていた。考えてる暇がなくなっていた。

今あるのは、溝と壁のみ。

……僕は何を間違えたんだろう？

「はあ……」と、僕は抱えたかばんにため息を吹きかけた。そして「よいしょ」というジジくさい掛け声と共にカバンを担ぎ上げ、帰路を歩み始めた。

説明が遅くなったが、この前の体育祭、どうやら結局、つくみ先輩が勝つたらしい。

僕は気を失っていたためその詳細は知らず、つくみ先輩に聞いても何やら誇張満載な説明（その話によると、先輩はついに小太刀術の極意に行き着いて、最終的に武器を使わず気当たりのみで辺乃先輩の木刀をことごとく弾き返し、制したとか語っていた。……んなバカな）が返ってくるばかりだったので、結局真実はわからず。あとで上弦さんに確認する必要があるだろう。

ともかくつくみ先輩が勝ち、晴れて上弦さんがウチのチームの入ったのである。

……本当に『晴れて』なのか疑問だし、『ウチの』という表現も何だか気持ち悪い。

どうもどうやらこのところ、大体のことがつくみ先輩の思い通りにいっているようだが、それが僕にとって良い方向なのか自信がない。少なくとも虹雪さんとの間に壁ができてる時点で、僕は一つ幸せを逃していることになるわけだし。

折角買った映画のチケットも誰かにあげなきゃならないし。

そういや、この前鳴海さんが泣いてた理由もまだ聞けてないし。

釈然としないことだらけだ。

そして僕はこんな釈然としない気分のまま、その土曜日開催された、加賀野つくみプレゼンツ、ボウリング大会に参加したのだ。た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9110h/>

---

つくみフェイス移動論

2011年10月4日08時55分発行